



蔵治光一郎 さん

(東京大学大学院農学生命科学研究科 教授)

山部会 川部会 海部会 市民部会

個人 市民団体 関係団体 **学識経験者** 行政 事務局



ヒアリング参加者 : 唐澤晋平

レポート作成者 : 唐澤晋平

取材日 : 2020年1月28日(火) ※山部会「まとめの会」終了後

取材場所 : 豊田市職員会館2階

あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

東京大学で森林水文学の研究をしている。流域圏懇談会が立ち上がったころは瀬戸の東大演習林にいたが、現在は東京勤務で毎日満員電車で揺られながらサラリーマン生活をしている。現在も豊田市、岡崎市には関わっており、一方で学生時代からの流れでタイやマレーシアなど海外の研究にも携わっている。

もともと東京生まれ東京育ちだが、子どものころから山の中で遊ぶのが好きだった。まさかそれが仕事になるとは思っていなかった。自分の子どもも自然の中にいることが好きになってきた。

あなたにとって、流域圏懇談会とは？

矢作川森の健康診断が2005年から始まっており、丹羽さんや洲崎さんと動いていたのが下地にある。他の部会に比べて山部会は初めから議論が盛んで、立ち上がった当初のメールややりとりを読み返すとしっかり時間をかけてとても真剣に議論をしていた。

流域圏懇談会は楽しくて安心して話すことができる。そして多様なジャンルの一流の方が参加し交流しているのが面白い。自分がいろいろな情報を持ってくると、それに対していろいろな意見や情報が返ってくる。森や木材の課題に対していろいろな立場で考えることができ、そうして得られた知見をいろいろな委員会の中で発言する際に活かしている。愛知を離れた今でも、流域圏懇談会のスケジュールは最優先で調整している。

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

10年間で流域の中で頑張っている人が出てきて小さな火種は生まれてきているが、当初から議論してきた課題は依然厳しい状況が続いている(森林組合の中堅離脱や山村のジリ貧など)。火種を大きく育てていくことも会の役割だと思っている。

森林のことは山側だけの問題ではなく、都会の人のあり方こそが重要。大学の立場としては最近の動きとして中学生の技術の教科書の中に森林や林業の話題を盛り込むことが実現しそう。街の人が山に来て、気づいて、共感してもらいたい。外への広がりはまだまだなので、流域圏懇談会にはこうした流れをつくるためのいろいろな仕掛けを展開していくことを期待している。



山部会のベースにもなっている矢作川森の健康診断



取材風景



丹羽健司 さん

(シェアカフェHYAKKEI | 非常勤店番)

山部会 川部会 海部会 市民部会

個人 市民団体 関係団体 **学識経験者** 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 神本 崇、中田 慎

レポート作成者 : 神本 崇、中田 慎

取材日 : 2020年1月28日

取材場所 : 豊田市職員会館



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

農水省の役人を30年やり、早期退職して10年間地域おこしを仕事にしてきた。それは、「森の健康診断」や「木の駅」、それに「山里の聞き書き」などでそれぞれの地域の困りごとや思いを掘り起こすことで、「木の駅」の立ち上げのためのアドバイスも行ったりしてきた。木の駅は全国で80カ所ほどできたし、もう10年になるので足を洗うことにした。「森の健康診断」も、矢作川流域では10年を一区切りとして終えた。これからあとの10年は実家の町家再生に携わることになりそう。城下町の築120年の商店を30年空き家にしてきた。そこを農山村移住(希望)者たちのなりわいや発信の拠点にしたい、いや学校と言った方がいいかもしれない。孤独な素人山主に寄り添ってきたことを今度は悩める素人店主たちとやることになるのかもしれない。

あなたにとって、流域圏懇談会とは？

懇談会発足時、私は非常に懐疑的だった。しかし我慢して続ける中で、国交省やコンサルの目指す予定調和路線に乗らず自由に議論ができる場ができていった。国交省がこんなに柔軟な取り組みをするとは思っていなかった。

自分にとって懇談会は、安心して自分の妄想(自分の理想・やりたい事)を言える場であり、そのためにどうしていったらよいかを語れる場である。それが言い放しに終わるのではなく、記録され、実現していくことをチェックできる存在でもあり、問題が整理されるという機能が懇談会にあったということが重要。そういう意味では懇談会はずごい存在だと思う。広がりには限定的だが、コアメンバーでいつでも議論ができる。

また、夜泊まって語り合うことが大事であり、山部会ではそれができる。元気が出るし、そこでも有意義な議論ができる。その時に大切なのは参加メンバーが上下なくフラットな関係で語れることである。

妄想は語る場がないとしばんでいくしかない。懇談会がなかったら実現していないことはたくさんある。自分の妄想で言えば100人ヒアリングや担い手づくり事例集とかであるが、山部会の取り組んでいるそれぞれの活動は妄想から始まったものであり、実現している。国交省は懇談会を運営してくれているが、その分の成果は出ていると思っている。

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

若い人、新しい分野の人が来ることへの期待はあるが、山部会で言うならば、現在思い描いているようなことが具現化することが大切だと思っている。こういった会議は、参加して楽しいと思うところを起点にしないと人は寄ってこない。そのためにも今のように当事者同士が対等平等に語り合うことができる関係を保証していきたい。このようなフラットな場がいろいろなところになれば社会は変わるだろう。

現場に寄り添う形で、流域の山のこと、木のこととかを思う人が集まって、ちょっとしゃべったら聞いてくれる、あるいは解決の糸口が見つかった、というような場だと思う。偉い人たちがいっぱい集まる場ではない。流域懇をそういう場に展開していく。今はまだ限られた人たちが、いずれそういう方向になっていけばいい。そういう場はまだ日本にない。例えば、森林組合作業員の100人ヒアリングでは答えは見えない。林野庁のガイドラインの話が蔵治さんからあったが、作業員の目線に落とし込んだガイドラインを流域懇でつくろうよと言えば、森林組合も作業員を流域懇に送り出す大義名分ができる。当事者が関わる。これからの流域懇ではこの流れが期待できる。

流域懇発足当初から流域内フェアトレードを提唱していて、根羽村森林組合では今村さんが奮闘しているが、昨年やっと額田町の「リタウッド」で小さな一歩を踏み出すことができた。このような動きを海も川も一緒になってもっと推進できれば素晴らしいと思う。一昨年から矢作川感謝祭とも協働できるようになった。これらも流域懇の大きな成果であり、多様なセクターの参画を目指す上で河川管理者である国交省が事務局をやることに大きな意義があると思う。

流域圏懇談会について、フリーコメント

2000年の東海豪雨から20年、「流域は一つ、運命共同体」の合言葉が再び脚光を浴び、矢作ダムを埋め尽くした流木と山肌に残る無数の土砂崩落の写真で人々の目は山に向いた。なんでこんなことが起こったのかを知る私の旅もここから始まった。05年から森の健康診断、09年から木の駅、流域懇は10年から始まった。

04年1月の矢森協(矢作川水系森林ボランティア協議会)発足時に、「私たちは、山と都会に幅広い森の応援団をつくり活動することを、ここに宣言する」とした。あの雪の日に仲間と謳いあげた胸の高まりを大切にしつつ、山と都会に応援団をつくれたか自問し続けたい。



丹羽さんの活動の原点である森林ボランティアグループ「足助きこり塾」(2001年設立)。子どもたちのきこり体験イベントは約20年続いている



2004年1月18日、大雪の中、矢森協の発足式



2014年6月7日、第10回矢作川森の健康診断。開会式で代表挨拶



2019年9月13～14日、第8回全国サミットin飛騨高山
全国各地から木の駅プロジェクトに取り組む仲間たちが集まった

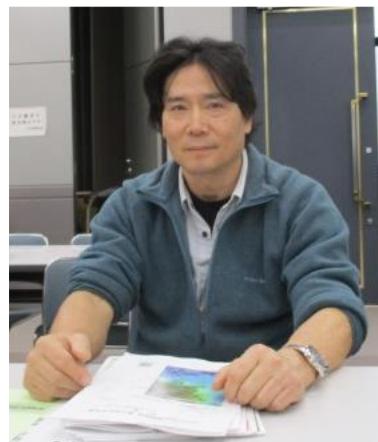


今村 豊 さん

(根羽村森林組合 参事)

山部会 川部会 海部会 市民部会
個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 事務局

ヒアリング参加者：野田賢司
レポート作成者：野田賢司
取材日：2020(令和2)年2月25日
取材場所：愛知県西三河総合庁舎 1階 待合室



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

1960(昭和35)年東京都出身。子どもの頃、犬小屋を木で制作したことがあります。中学生時代に山登りに目覚めたことが現在の原点です。登山が好きで、登った山頂から見る風景によく感動しています。家庭は飯田市で、農業・畜産を営んでいます。根羽村とは地区担当職員として9年間林業振興に携わったことが縁で、根羽村の林業・地域活性化の魅力に惹き込まれました。県職員を退職し、2012(平成24)年から現職(根羽村森林組合:信州木材製品認証工場・JAS認定工場、あいち認証材認定事業者、JIA長野県クラブ賛助会員、スギダラ矢作川流域支部、SGEC/PEFC 森林管理認証、SGEC/PEFC CoC認証)。

根羽村を農林業や地域資源で自立する理想的山村モデルとするため、根羽村長(=森林組合長)と一体となり、志を同じくする方々と共に根羽村トータル林業のさらなる発展を目指して戦略的活動を展開しています。

あなたにとって、流域圏懇談会とは？

源流域再生のための次の4つの大久保村長提言¹⁾を根本にして、根羽村のトータル林業を通して、具体的に実践展開します(図1、図2参照)。

- 1) 源流域は私たち矢作川流域圏の共有財産。この源流を守ることは緊急の課題。100年先の日本の存続に向けて「源流基本法」を設け、あらゆる力を結集する仕組みを構築する。
- 2) 流域圏における安全・安心で、持続的な循環型社会のあり方に、もう一度光を当て、理想的なシステムを確立する。
- 3) 21世紀の循環型社会形成を果たすため、源流が培ってきた源流文化を再構築し、これを流域圏に伝える教育の場(機会)を整備する。
- 4) 国土保全という大変重要な役割に機能している源流域の農林業の経営意欲の活性化、緊急の鳥獣害対策、森林の土地政策の確立を図る。



図1 再生戦略



矢作川流域ものさし



図2 木づかい

根羽村森林組合は、矢作川流域に関する様々な課題を解決するための検討を進めている矢作川流域圏懇談会に、2013(平成25)年度から、民(関係団体)の一つとして地域部会の山部会に参加しております。私は山村再生担い手づくり事例集、森づくりガイドライン、木づかいガイドラインの作成に参加しています。矢作川流域には当森林組合の他に飯伊森林組合(長野県)、豊田森林組合・岡崎森林組合(愛知県)、恵南森林組合(岐阜県)がおられ、特に当森林組合には製材工場があることから、木づかいガイドラインのまとめ役を担っています。

木づかいガイドラインはまだ作成途上ですが、策定作業は3県をまたぐ矢作川流域林業のあり方を考える契機になりました。私は矢作川流域圏懇談会への参加が契機となり、矢作川流域の林産業の振興や多くの方を木のファンにする「木づかい推進」の創造的取り組みに挑んでいます。

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

(1) 県外(流域圏)への様々な「木づかい」の啓発

根羽村は矢作川の水源地として下流域から認められ交流してきた歴史があります。村は木材加工場を保有しJAS規格も取得しました。一般市民に使える木材加工品が増えていますが個人住宅着工件数は減っています。私たちは、建築材以外の木材利用法も考えて次のような製品を作っています。環境性能重視型木質舗装材ブロック、スマートエコハウス、簡易セルフビルドハウス、家族風呂、流域ものさし(矢作川流域を学ぶワークショップ参加者の手作りで、矢作川流域産のいろいろな木をモザイク状に並べ、長さも矢作川の本川流路長118kmにちなみ11.8cmとしたもの。図2)、癒し系「木っころ」、フリーマガジン「耕Life」とのコラボ製品、動く木のおもちゃ、スパイラルタワー(軽やかな音を立てながら落ちる木の玉)、どこでもシリーズ(ブランコ、オセロ、ウッドデッキ、もちつき機など)です。当懇談会を通して流域圏に「木づかい」の啓発を期待します。

(2) 里山資本主義の実践的展開

私たちは里山資本主義で、里山の産物を活用して広く流通させたいと考えています。素敵な時間が商品になり、そこで生まれるスモールビジネスが生業になるのです。豊田市足助地区の香嵐渓は、里山を観光資源として確立させた成功例と言えます。当懇談会の活動はこの後押しになると期待しています。

(3) 魅力的な村づくり推進に期待

私たちは既に幾つかの大学と、①農林分野・山地酪農の導入、②森林体験・住居・環境分野、③木育分野、で連携を始めています。当懇談会でも、さらに魅力的な村づくりに繋がる連携活動を期待します。

(4) 「山村再生・流域圏担い手づくり事例集」の活用

私たちは木や森に関わる団体の横のつながり・連携を図りたいと考えています。その糸口・契機として、森や山の感謝祭を、山でも海の関係者と協働で開催できることを願っています。また、「田舎の親戚制度」を山村地域に定着させ、都市部の子どもたちに田舎や第一次産業を原体験(記憶の底に長く残って以降の精神形成に影響を与える幼少期の体験)できる場を増やしたいと考えています。

(5) 矢作川流域林業担い手100人ヒアリングの成果を引き出す

架線が得意な恵南森林組合、人材交流が盛んな岡崎森林組合、森づくり会議など先進的な動きのある豊田森林組合など、林業の担い手と英知を集めて議論すれば、ヒアリングの成果が活かせると思います。

(6) 矢作川流域圏山村ミーティングの推進

流域の森林組合員を集めるテーマが欲しいです。100人ヒアリングでポイントとなるキーワードで良いと思います。懇親会は設けてください。森林施業中の留意事項は、森林認証の取得有無に関わらず、どの森林組合でも必要です。100人ヒアリングの中でぜひそのような観点も議論していただきたいと思います。

(7) 懇談会発足10年の取りまとめ

流域圏年表は、矢作川と繋がり深い関係団体、森林組合の発足や統廃合を漏れなく記載して欲しいと思います。山部会は地域持ち回りの上毎回懇親会を開き、参加者の心を開き勉強になりました。この形態は大変画期的で、参加者のモチベーションを上げています。この点も記載して欲しいと思います。

(8) その他

- ・森・人・活動が一目で分かる「流域圏地図」の制作。
- ・活動成果発信に必要な予算の確保。流域圏の市町村が同時に「矢作川条例(仮)」を制定すれば、行政が条例に基づく取組を始めるとの見解(蔵治座長)もありますが、中部の環境先進5市サミット共同宣言のように、「宣言」でも可能ではないかと思えます。
- ・「矢作川流域圏木づかいガイドライン」で、人のライフステージ別に木づかいが具体的に検討されること。
- ・当懇談会が公共(市町村)に働きかけ、流域連携で木づかい(矢作川流域圏内での木材利用)がさらに進展することで。自治体以外で木づかいの事例があれば情報収集したいと思います。
- ・市民会議に出席し、健全な森林土壌が海の富栄養化に関連があることを初めて知りました。合同部会で川部会・海部会に聞きたい事項や知ってほしい事項をテーマに挙げ、フリーディスカッションされることです。

懇談会へのフリーコメント

(1) 矢作川流域圏木づかいガイドラインの補足

ガイドラインづくりには、メンバーに各自治体、製材所、建築者等も入れ、また、とよた森林学校と連携して、①流域圏について共通認識できるイベントの開催、②森林環境教育、③地球温暖化防止、という視点も活かしたいと考えています。

木づかいに関するどこでもシリーズにおいて、山部会参加者に「どこでもサウナ」を体験いただきました。今後は、サウナの周りでゲーム・婚活・山村ミーティングを行うなど、その活用を模索しています。長野県森林環境譲与税の活用提案は、現在、東京都墨田区や府中市で行っています。



写真1 人工林の整備・管理

写真2 イワナ・アマゴが棲む溪流

写真3 恵南豪雨被災森林の回復

写真4 森林組合の取り組み説明



写真5 森林造成試験地案内

写真6 带状伐採・植栽・獣害対策

写真7 製材加工場木材乾燥施設

写真8 「木づかい」事例紹介

写真1～8

今村参事の
日常のひと
コマ

上段：森林
資源の利用
と保全（多
面的機能の
管理）実務

下段：ト
ータル林業
の推進、「木
づかい」の
啓発・普及
活動

矢作川流域圏3県への様々な依頼は、懇談会から正式な依頼書で出すと良いでしょう。事業を戦略的に推進するためには財源の確保が必要です。森づくりガイドラインと重なる部分は、川部会、海部会の団体を含めて流域再生をテーマにすると良いでしょう。試作提案した「流域ものさし」は流域圏の名刺になると思います。活用法を検討します。

2014(平成26)年9月、根羽村森林組合内に「全国スギダラケ倶楽部矢作川流域支部」を立ち上げました。当支部は、「日本全国スギダラケ倶楽部」の活動に準じ、戦後の復興期に段階的に植栽されてきた矢作川流域の人工林をきちんと活用し、流域内の林産業と山村・里山に活力を生み出し、矢作川流域市民の全ライフステージにスギ・ヒノキや広葉樹をきちんと活用し、あらゆる生活空間をスギダラケ(ヒノキダラケ、広葉樹ダラケ)にすることで²⁾。木づかいガイドラインに「木づかいライブ・スギダラケキャラバン」の活動を掲載したいと思います。「木づかい推進スギダラケキャラバン」の訪問実施箇所数は、年々増加しています。世の中に木づかいニーズを感じています。安城市の小中学校野外教室では、茶臼山高原の水源の森を使って木づかいを推進しています。さらに「木と軽量なアルミ」を使った「どこでもシリーズ」を展開したいと考えています。

田舎と都市の人がお金を出し合って「木づかい」することで、田舎の人は里山を魅力的な場所に変えることができます。都市の人は生きる技能、作物の栽培方法等が習得できます。当ガイドラインでこの制度も紹介したいと思います。長野県は新たな森林環境税の使い道として、防災・減災の観点から、間伐の緊急性を有する林分を定め、積極的に活用していく方針です。各自治体の木材利用指針は、生産から搬出までのサイクルを明記しています。これを広く周知したいと思います。

(2)「木づかいガイドライン」で啓発を加速する

最近、三河湾では、これまで好調だったアサリやノリの生産量が減少し、漁業生産額の確保が厳しい状況となり、海面漁業者が頭を抱えられていると聞きます。一方、上流域の林産業も厳しい状況です。上流域の小さな森林組合が今後生き残れるかどうか、様々なアイデアを取り込み実践活動に励んでいます。この一つの柱として、矢作川の上下流連携のもと、「矢作川流域材」という名称の定着を目指しています。矢作川上流域の5つの森林組合から供給された木材を下流域の岡崎市・豊田市・安城市・碧南市・西尾市・刈谷市等の都市部で大いに使っていただけるよう、開発活動に取り組んでいます。「木づかいガイドライン」で啓発がぜひ加速されることを願っています。

取材を終えて

山の担い手として斬新で精力的に活動されている今村さんへの取材機会をいただきました。取材を通して、今村さんのアイデアが豊富で啓発・木育活動まで広く深く展開されている「元気パワー」に圧倒されました。近年、新たな形で自然や農山村との繋がりを取り戻す動きが増えています³⁾。そして、里山が生み出す生態系サービスを次世代の流域に伝えるために、様々な生態系サービスを組み合わせ、調整しながら流域の社会的なシステムを再構築していくことが重要⁴⁾といわれています。今村さんの意欲的で実践的な取り組みと提案は、矢作川流域圏において、生態系サービスを利用する産業を復活させ、流域内供給サービスのアンダーユース化と調整・文化サービスの劣化を是正し、固有の文化や豊かさを持った地域を再生させ持続可能な自然共生社会形成につながることでしょ。改めて、今村さんが取り組まれている「木づかい戦術」に共感した一人として、矢作川流域圏懇談会を仲立ちに、微力ながらご協力できればと願う次第です。

(取材者)

〈主な参考文献〉

- 1) 根羽村：矢作川流域連携による地域づくり～地域内循環と流域連携～，2018。
- 2) 今村 豊：根羽村森林組合の取組みについて-「トータル林業」の確立へ-，森林組合，No.539，6-10，全国森林組合連合会，2015。
- 3) 中静 透：わが国における生態系サービスの変化，環境情報科学，45-3，5-6，2016。
- 4) 山本勝利：特集の編集にあたってー里山の多様な利用価値の再生に向けてー，環境情報科学，45-3，1-4，2016。



洲崎燈子さん

(豊田市矢作川研究所 主任研究員)

山部会 川部会 海部会 市民部会

個人 市民団体 関係団体 **学識経験者** 行政 事務局



ヒアリング参加者 : 近藤朗、高橋伸夫、鈴木輝明
 レポート作成者 : 鈴木輝明
 取材日 : 2020年3月7日
 取材場所 : 名城大学大学院総合学術研究科鈴木研究室

あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

東京都生まれ、写真のような美人、早稲田大学人間科学部卒業、同大学院理工学研究科後期博士課程を経て現在は豊田市矢作川研究所主任研究員。専攻は植物生態学、博士(理学)。矢作川流域の植生の現状と成立過程、その望ましい管理手法等の調査・研究に従事。日本生態学会等で活動成果を報告。

大学院では里山(コナラ二次林)をフィールドとして、管理放棄後の植生変化をテーマに研究を行っていた。高校までは自然とはほぼ縁のない生活を送っていたが、ジブリアニメ「となりのトトロ」の舞台となった、東京と埼玉の都県境にある狭山丘陵の一角にある大学のキャンパスに通ううちに、人と自然の共同作業でつくられてきた里山は、これから人が自然とうまく付き合っていくお手本になる場だと思えるようになった。

その後、アルバイトで矢作川河畔の植物調査に参加したことがきっかけとなり、1998年に豊田市矢作川研究所に就職した。矢作川流域は名古屋都市圏に隣接しているながら豊かな自然環境があり、住民が地域の自然に深い思い入れを持ち、保全活動をしてきた歴史があることに惹かれた。

流域の森林で最も広い面積を占めているのが人工林で、その次が里山林である。いずれも人によってつくられ、維持されてきた自然で、経済的な価値が失われて管理されなくなったことで劣化している。身近な自然に関わる人の数を増やすしくみをつくらないと、流域の自然を再生することはできないと考えるようになった。

矢作川水系森林ボランティア協議会(矢森協)の働きかけで2005年に始まり、10年間続いた市民参加型の人工林調査「森の健康診断」の構築と運営に関わった。

また、都市と山村の住民が交流し、連携を深めることで持続可能な流域づくりにつながるとの思いから、仲間たちと年に一回、豊田市駅前で「いなかとまちの文化祭」を開催している。

あなたにとって、流域圏懇談会とは？

森の健康診断で市民と研究者の協働による森林調査を実施してきたことが、流域圏懇談会の山部会での活動の原点になっている。山部会の主要メンバーはほとんど森の健康診断の実行委員や関係者である。

流域には多くの課題があるが、その解決をめざす懇談会も、楽しみがなければ続かない。山部会では現地視察に加え、現地の宿泊施設で、懇談会メンバーのみならず流域内の森づくりや木づかい、地域おこしの関係者と、宿泊つきの交流会を行うことを提案した。勉強会と交流会、現地視察を組み合わせたワーキンググループは2012年度から山部会の定番(名物)となり、他部会からのリピーター参加者も出るようになった。自分は矢作川流域の宴会部長を自認しており(笑)、懇談会は山、川、海、市民の4部会で構成されているが、「夜」部会の座長を担っていると考えている。



取材風景

山部会のメンバーはいずれも、地域の森林・山村再生に向かって心を一つにしている仲間である。この10年間で50回以上開催されてきたワーキンググループで、メンバーの発案によりさまざまな取組の現場を訪れたり、ユニークなキーパーソンと出会えた経験は大変貴重なもので、人生の大きな励み、心の拠り所になっていると思う。

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

懇談会は、他の流域にはない非常に貴重な場であり、今後も充実した会にしていきたいと思っている。

その上で、立ち上げから10年たっても、山・川・海の部会間で流域の問題についての認識が十分共有されていないことを残念に思う。今後は合同部会の開催を意図的に増やすといいのではないか。例えば川の水質は、部会横断的なテーマである。海部会は、アサリ等の極度の不漁の原因が流域からの栄養供給不足と位置付けている。そうであれば山部会や川部会も一緒に、栄養収支に関わる河川の流域の変化(農地利用の変化、都市化に伴う水利用、排水処理の変化等)を考えてもいいかもしれない。

また、各部会ともメンバーの出入りが少なく、固定化していることも課題である。外部の人、とりわけ若い人が興味を持って、継続して関わっていききたいと思うような組織にしていけないかと思う。



'11.9.29 「第5回勉強会(川地域)」バスツアー
茶臼山のブナ林での現地説明



'14.9.19 第20回山部会WG(根羽)
日本全国スギダラケ倶楽部の若杉浩一さんと

「洲崎燈子は、矢作川研究所の博士。ワインをこよなく愛する踊る研究者は今や流域の村づくりと飲み会にはなくてはならない存在だ。」
(文・写真/丹羽健司 月刊杉WEB版 2014年12月号 No.107)



'17.9.9 第42回山部会WG(恵那)
現地勉強会 天竜川竹筏下り体験



沖章枝 さん

(水と緑を守る会・岡崎 代表)

山部会 川部会 海部会 市民部会
個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 事務局

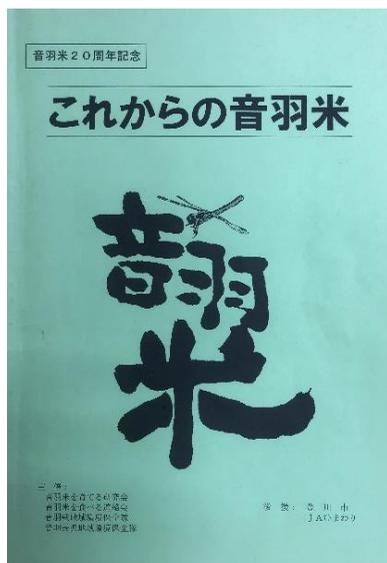
ヒアリング参加者：近藤 朗
レポート作成者：近藤 朗
取材日：2020年1月28日
取材場所：豊田市職員会館



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

名古屋市守山区生まれ。元愛知県職員であった(1963年入庁～1971年)。1967年、結婚を契機に岡崎市(六名)に移り住み、職場も県庁から地元の西三河事務所(当時：現在の西三河県民事務所にあたる)に異動させてもらった。今でも山や自然が豊かな岡崎が大好きなのよ。

1980年代、岡崎国立研究所研究員の妻で農薬(害)の研究をされ、「農薬を考える会」を立ち上げた伊藤玲子さんと知り合い、「音羽米を育てる研究会」発足(1992年)に関わる。富山和子氏の著書「日本の米」などは、私の教科書だった。食の安全・安心、かつ美味(おいしい)を掲げ、脱化学合成農薬・肥料を目指した「音羽米」を栽培し(旧音羽町、現在は豊川市)、消費者に届けようという取組は、最初1988年から始まったの。その源流域(旧額田町大重)でのゴルフ場開発計画が発表され、これに対する反対運動(除草剤が米栽培地に影響を及ぼすため)が私の市民活動の原点となる。この活動を通じて矢作川沿岸水質保全対策協議会の内藤連三さん(「矢水協」は、一つの自治体には、ゴルフ場は二つまでと規制していた)や、愛知教育大学の森山昭雄さんとも関わり、特に森山さんからは、「沖さんは、水がめになれ」と言われ、1993年に「水と緑を守る会・岡崎」を設立、主宰することとなった。内藤連三さんには、流域で良くないことを見つけたりすると、よくチクリに行ったのよ。



音羽米20周年記念誌(2008年6月発行)
沖章枝さん所有



「鳥川ホタルの里」のホタル(愛知県公式観光ガイドHPより)
この流域に男川ダムが計画されていた

その後、額田町で計画されていた男川ダムや、海上の森(瀬戸市)での愛知万博反対運動にも関わっていった。万博では、ボーリング檣の中に籠ったりもした。(古巣の)愛知県へは情報開示請求なども行い、職員にずいぶん煙たがられたのではないだろうか。仕方がない、私には守りたいものがある。

様々な活動は、私の生き方そのもの。活動を通じて、いろいろな人と繋がるのが喜びでもある。地元の人たちとかね、とにかく人と話をするのが大好きなのよ。

あなたにとって、流域圏懇談会とは（見えてきた課題）

懇談会には、設立当初から関わっていた。山部会が中心である。すごいな、こんなに多様な(セクターの)人たちがいる。私には、大いに学べる場であった。残念だったのは、岡崎市役所が、当初それほど前向きではなかったこと。だから私は、懇談会の資料をいつも市役所や岡崎森林組合に届けていた。向こうには、困ったなと思われるかもしれない。

懇談会山部会での学びを通して、新しい政策提言などが提案できるようになった気がする。だから、もっともっと岡崎市(役所)政策にも関わろうかなと思い始め、興味のある委員会・検討会などの傍聴にも申し込みをしている。3年前から岡崎市営農支援ボランティアも始めた(農家は人手不足なの)。岡崎の市民活動レベルは随分と高くなっているが、行政としてのレベルはまだまだだと思う。結果として市民には、乙川のリバーフロント事業しか見えてこないのではないかしら。

特に、岡崎の林業(政策)はまだまだ。額田の森を活かしきれていない。せつかく額田には、唐澤さん(夫妻)のような若者が出てきてくれたのに、それを岡崎市がうまく活用できていないのが歯がゆい。人もそうだし、いいもの、いいところが山にはいっぱいある。もったいない。山には木が立派に育っている。もっと木を活かして使ってほしい。



2018年11月17日 山部会WG(岡崎)にて
奏林舎の唐澤晋平さんを訪問、薪割り体験実施



2019年6月22日 山部会WG(岡崎)及び事例集交流会にて
鳥川視察、鳥川ホテル保存会の方々から説明を受ける

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

「もう一度、昔のあの山の活気を取り戻せたら」というのが私の願い。これからの懇談会の中で、それが果たせるようにしていきたいし、私も役割を果たしたい。

これからさらに発展できるようなことを考えたいし、新たなメンバーも誘いたい。特に下流域(まち)で木を使う取組ができる方も、どんどん取り込みたい。懇談会と私は、その繋がりをつくる役割を担うべきかな。そういったことで、矢作川流域圏懇談会を「ブランド」にしましょう！



2020年1月28日 沖さんへの取材風景(豊田市にて)



2016年1月 山部会での天下杉公演にて
優雅な舞を見せる沖さん
「蝶の如く舞い、蜂の如く刺す」(近藤評)

流域圏懇談会について、フリーコメント（文責 近藤朗）

私がどうしても沖さんへのヒアリングをしたいと希望したのは、同じ元愛知県職員というだけでなく、それぞれの活動や業務を通して不思議な縁があったから。沖さんが勤務されていた県の地方機関である西三河事務所は、現在は西三河県民事務所と名前を変えて、乙川河畔にそびえ立っているが、私が一時期勤めていた岡崎土木事務所（当時：現在の西三河建設事務所）もこの建物の中に入居している。私はここで、1998年頃河川の担当をしながら、当時計画されていた男川ダム（額田町内 鳥川）にも関わっていたが、当時反対運動があり着手できずにいた（2006年の岡崎市・額田町合併後、結局中止）。また私は、2003－2005年にかけて、愛知万博・瀬戸会場の整備担当であったが、これは海上の森全面での博覧会会場計画への反対運動もあり、分散・縮小された後を受けてのこと。実はどちらの反対運動にも、沖さんが関わっていらっやったとのこと。当時は、いずれも直接沖さんとお会いする機会はなかった。



2020年3月完成の乙川「桜城橋」、表面は額田産材で木装化され、その向こうには、愛知県西三河総合庁舎（西三河県民事務所、西三河建設事務所が入居）が見える



2005年愛知万博・瀬戸会場と海上の森

この事を知ったのは、とある懇談会山部会での夜のこと。場所は確か額田のくらがり溪谷であったと思う。「あなただったの？」と笑いあったのだけれど、その場には他に、沖さんとは別のスタンスで海上の森万博反対運動をされていた曾我部行子さん（海上の森の会）もいたし、2000年東海豪雨後の新川・庄内川激特事業の際、河口にある藤前干潟を巡って対峙していた野鳥の会の高橋伸夫さんもいた（彼とも当時は会っていない）。

私の頭の中で20年ほどの経験が走馬灯のようにぐるぐる駆け巡っただけけれど、とても不思議な感覚。時を経て今ここで一堂に会して、酒を飲みながら談笑していることが...

立場が違うとかどうかでなく、ひとつの課題に対して「同じ方向を向いて」いられるかどうかの方が重要なんだと改めて強烈に認識した夜。地域、流域圏を良くしたいという思いが同じであればいい。その事を再認識した取材であったし、矢作川流域圏懇談会そのものの意義・本質はそこのだろう。



2017年10月13日 山部会WG（岡崎）の夜（くらがり溪谷にて）

蛇足ながら、公共建設事業を推進する立場であった私にも、沖さん同様「守りたいもの」があった、いや、今でもある。つくるもの（特に河川）が未来の世代にとって有意義なものとして継承されなければならないということ。だからこそ目先のことでなく、環境や営みという多様な視点を持って進めなければならない。これは、私が父親になった時、そして矢作川に出会った時（実は同時期）、この時より大きく意識が変わった点である。ただし、残念ながら閉ざされた行政のロジックのみで進めていけば、大きな変革は望むべくもなく、新たな視点を導入するためには、沖さんたちのような市民運動は不可欠であっただろうし、私自身はとても感謝している。実は、沖さんと私が「守りたかったもの」は、意外と同じものではなかったのか、とさえ思う。



近藤 朗 さん (愛知・川の会)

山部会 川部会 海部会 市民部会
個人 (市民団体) 関係団体 学識経験者 (行政) 事務局

ヒアリング参加者 : 石原 淳
レポート作成者 : 石原 淳
取材日 : 2020年2月23日
取材場所 : 名古屋市市中村区名駅にて



近藤朗さんの経歴と現在の活動について

《経歴》

1957年(S32) 愛知県名古屋市生まれ

1980年(S55) 愛知県庁入庁(1988年「名古屋オリンピック」要員と言われたが、翌年ソウルに負け幻と消える)
1989年(H元)～砂防課勤務 元年災(恵南・東加茂豪雨)対応、以降平成時代の大災害にはほとんど関わっていく
1994年(H6)～愛知県豊田土木事務所(現在の豊田加茂建設事務所)にて
多自然型川づくり『矢作川古巣・百々水制工、籠川、仁王川、逢妻女川』
の推進、創設されたばかりの作川研究所にも関わる
1999年(H11)～河川課(環境) 2000年東海豪雨後の河川環境保全対策を推進
2001年7月、矢作川川会議メンバーと共に第4回全国「川の日」
ワークショップに参加し、見事グランプリも受賞
2002年、宮田昌和、碓さくら氏と共に韓国・漢江へ



籠川の魚道

2003年(H15) 河川課を離れる際に、「川」を生涯のライフワークとするため、「愛知・川の会」を設立(3月)
2003年(H15)～愛知県公共建築課にて「愛知万博」瀬戸会場整備担当、「海上の森」と出会う
2005年(H17) 愛知万博開催、この年に『第8回「川の日」ワークショップ on 矢作川』を誘致、開催する
2005年(H17)～2018年(H30)3月の県退職まで、どこにいても「川の会」を通して、河川(矢作川等)に関わる
2009年(H21) 2010年開催の生物多様性条約締約国会議COP10に向けたNGO生物多様性フォーラム(JFB)に参加(理事)、
ここで、伊勢湾流域圏の市民活動調査を開始する
2012年(H24) 伊勢湾流域圏での市民の繋がりを基に、3県による「22世紀奈佐の浜プロジェクト」をスタート
同年、矢作川流域圏懇談会の3年目にして、
初めて山部会(根羽村)に参加 ～現在に至る

2013年(H25)～ 2013年より「愛知・川の会」三代目代表、
2017年から事務局長に就任 ～現在に至る
2019年(R1)～矢作川流域圏懇談会10年誌編集委員を担う。また伊勢湾
流域圏の学生、若手たちを中心として中部5県の流域連携
を促進するためのプロジェクトを別にスタートさせた

2019年12月 中部5県流域連携のキックオフを長良川から



あなたにとって、流域圏懇談会とは？ また、これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

まず、私の矢作川に対する思いについては、2004年4月矢作川研究所広報誌「Rio」への寄稿文(次頁)を読んで下さい。

私が初めて懇談会に参加したのは、2012年、根羽村で開催された泊りでの山部会から。洲崎燈子さんからの誘いであったが、私自身は2010年以降、矢作川に直接関する業務から遠ざかっていた時期でもあり、とても嬉しかった。その時驚いたのは、集まっていた根羽村森林組合の方々がとても若かったこと。聞けばIターンの方も多く、北海道や関東圏などからも。実は、2010年頃実施していた伊勢湾流域圏の活動調査で、岐阜県の郡上市などでも同様の現象(若者たちの山村へのIターン、Jターン、Uターンによる回帰)が見られていて、岐阜県特有の事かなと思っていたが、矢作川流域でも起こっていた。確実に時代が変わってきたな、と思い知らされた。

矢作川流域圏懇談会については、10年続けてきたことに対して、河川管理者や市民達に大いに敬意を表する。ただ、これからの10年を見据えたときに、単に同じことを続けるのではなく、新たな展開を模索すべきだろう。それは、懇談会外部への発信であったり、次世代への継承を積極的に推進していくことだと思っている。私たち世代は、これを全面的に支援したいと考えているが、次の主役は私たちではなく次世代でなくてはならないと思う。

豊田市矢作川研究所 「Rio」

矢作川との10年、これからの30年

2004年 4月号から

近藤朗 寄稿

私が愛知県の河川管理者として豊田土木事務所（現在の豊田加茂建設事務所）に赴任したのは1994年のことだから、今から10年ほど前のこととなる。当時すでに豊田市扶桑町沿岸の矢作川水制工と古巣水辺公園は完成しており、この工事に対して市民から贈られた感謝状が事務所に飾られていた。着任早々関わらせていただいた「豊田市矢作川環境整備計画」検討委員会では矢作川環境をより良くするための熱い議論が展開されており、この提言によって「豊田市矢作川研究所」が創設されるなど、豊田市は、この頃大きく変わろうとしていた河川行政の流れが、最も色濃く反映されていた現場であった。

従来の行政手法から見て、近自然工法や地域との連携などの新しい河川管理の考え方にはカルチャーショックを覚えつつも、現場では不思議と抵抗なく受け入れてしまった気がする。当時そのような仕事のひとつに、豊田市西部を流れる逢妻女川の多自然型川づくり計画を、堤小学校の児童たちと検討するというものがあり、ここでは子どもたちと真剣に議論をした。さらに矢作川のこととなれば黙ってられない大人たちも大勢いて、矢作川流域で川の仕事をするためには、河川環境を含めた広範な知識とさらに柔軟性が要求され、私自身相当な勉強をしなければならなかったとい

これからの30年

矢作川との10年、

近藤朗

うのが実感である。結果としてこの時の貴重な経験は、私にとって河川管理者としての原体験というべきものとなった。

豊田を離れた後も、様々な立場で河川行政に携わり、その中で川と人との関わり、とりわけ子どもたちに目を向けた取組みに力を注ぐようになったが、これは矢作川での経験がベースにある。問題解決のためには「川を子どもたちへ引継ぐ」（世代間調停）という視点が重要であると確信したからであるが、ちょうど10年前に誕生したわが子を調停相手と認識し、彼に豊かな自然の恵みを楽しむ世界を残したいという親の願いでもあった。

矢作川では現在、河川整備計画の策定が進められていると聞くと、その成果に期待をしながらも、重要なのは策定後に続けられるべき流域全体での取組みにあると考えている。整備計画実現に向けた当面の目標年次は30年間であり、概ね一万日である。これは、豊田市西広瀬小学校児童が世代を継承しながら、今まで一日も休まず続けてきた水質監視の歴史に匹敵するが、今後も河川管理者は流域住民や多くの関係者などとともに議論と研究を重ね、彼等と同様、不断の努力をしていくことになるのだろうと思う。

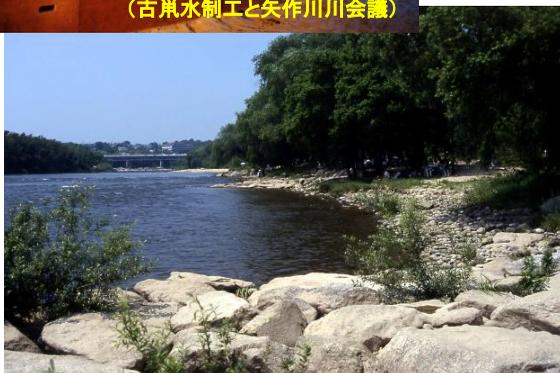
（こんどう あきら、愛知県建設部 公共建築課造成グループ 主任主査）



（古巣水制工と矢作川川会議）

16年前の寄稿であるが、最後に書いた事は、何だか「矢作川流域懇談会」を予見していたかのような流域全体での取組を、議論を重ね、いつまでもいつまでも...

矢作川の見張り番
豊田市西広瀬小学校



（逢妻女川柳枝工）



鷺見哲也 さん

(大同大学 教授)

山部会 **川部会** 海部会 市民部会

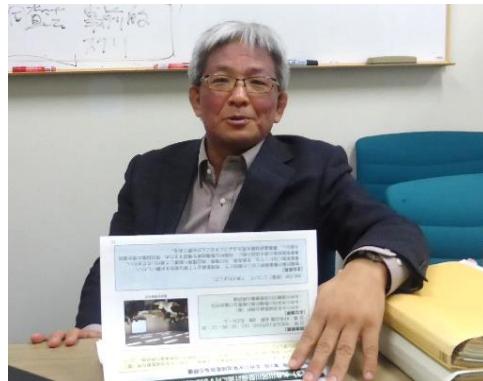
個人 市民団体 関係団体 **学識経験者** 行政 事務局

ヒアリング参加者： 中田 慎

レポート作成者： 中田 慎

取材日： 2020年2月24日

取材場所： 大同大学白水キャンパス 鷺見研究室



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

2003年まで 名古屋大学工学部

2007年より 大同大学工学部

もともと、私は水文屋で、川ではなく、山に雨が降ってどう出てくるかというのを専門にしていました。そのあと、辻本先生から「木津川で河川生態学研究会があって、河原の中の伏流水を調べられる」と声をかけられ、ここで川とのつながりができました。そこでだいぶ河川生態の勉強をしたんですよ。山地の物理屋がとにかく川に引きずり込まれて、川の物理と、土砂処理について、だいぶ勉強させられましたね。逆に言うと、それに育てられました。水文分野というのをやっている人がたくさんはいないので、川のことを勉強したおかげでどっちの話もできるようになったんです。

たとえば災害をやっていると、人間の話とか社会の話とか計画論の話になってくるとか、全部入ってくるじゃないですか。そこまで研究をやっていると、川全体のマネジメントとか計画論とか維持管理の実態とか勉強して、あらかた分かるようになります。

最近では、分野を跨いだところを研究・調査することが多くなりました。たとえば、生き物を対象にしている人から、水回りの話を調べて欲しいというオファーがあれば、私は水の物理屋なので、水のソースも含めて、上流は？地下水との関係は？といった一連の水のつながりを全体を含めて対応することができます。私自身、そういうことに対しては嬉々として対応しています。水文が水文の中だけで仕事をしていても、特化した一般人に理解されないような仕事になってしまう。他の専門と跨いだところで仕事をしていると、そちら側にも理解してもらえるし、こちら、知らない専門分野の勉強もできる。こういうことが大事なんだなと思いつつ、今、力を入れているところですね。「解釈」というのがとても重要になります。

あなたにとって、流域圏懇談会とは？

「私にとって」というと、私は他の皆さんと違って特殊なケースだと思っているんです。流域の中に住んでもいないし、流域には関わりが少ない大学に所属しています。流域外にいる河川工学の学識経験者という立場なので「いくつかの話でこうなっているからこうですね」という交通整理はできるけれど、あなたはここにどういった思い入れを持って取り組んでいますか？となると、そもそもそこには理由がないんです。

私が流域圏懇談会に関わるようになった唯一のきっかけは、発足黎明期の頃、リバーカウンセラーという肩書をもっているということだけでした。肩書がついた直後に、ど真ん中の川部会に入ることになり、当時は何の主体もわからないまま入って、そのあとは当時の事業対策官に引っ張られた形になります。

例えば、川部会で発表したこともある白浜工区の調査については、今年はやりましたが、その前の3年間はやっていないです。そもそも、私自身がそこに目をつけていたわけではなかったのです。河原で整備していた裕さんとか森林塾の方に対して、懇談会から「あれやったらどうか、これやったらどうか」というアクションを求める話がされていたのですが、「そもそもそこはどのような場所なのかがわかっていないとできないのではないかな？」ということを提言しました。そのための基盤情報整理のために調査を行ったわけなんです。

水は出るのか出ないのか？出るような環境にあるのか？という話で、河床を削ったほうがいいのかもしいろいけど、やっぱり土砂がたまりやすいのではないかな？地形変化の特徴については、客観的にモニタリングする必要があり、そこはある意味で技術提供という形で、わからないことをわかるようにする対応をしました。ですから、私にとっての流域圏懇談会は、私に研究の材料を提供してくれたということになりますね。

そして、私にとっては非常にいい場所といえます。いろいろな材料、たとえば、落差があるときに落差がどのように解消されたいののだろうか？でも、そもそもどうしてこんな落差ができてきたのかといったような話について、解消するためにどんな問題があるのか、というあたりを解説するという仕事が必要になります。それは専門の分野、学識者としての位置づけだろうと思うんですけど、私自身がそこで研究するというよりは、そういう現象が起きているところでどれくらいのことが解説できるのか、全体を見回してそれはどういうことなのかということについて貢献できるな、と思えると参加している意味があるんだと思っています。

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

【川部会としてのアウトプット】

かつての懇談会は、現場で川の像の話ですら整理できておらず、リクエストはあるけれど、自分のところで交通整理できていないという状態でした。かたや、矢作川の土砂問題は、「上流側からダムに支障がないようにコントロールするにはどうしたらいいか」という話で縛られています。そこは危険だな、と感じています。

川部会では、ステークホルダーとして、利水、発電、治水も含めてそれぞれに、それぞれのことを要求しようとするし、それぞれ活動している方もそれぞれの主張をします。主張しすぎるとみんなが望む像というようなことをまとめること自体が難しくなるので、まずはみんなが耳を立てるといふところしかやり様がなかったという経緯があります。今は、みんなの話が一通り出てきたところなので、リーチスケール、瀬淵が一組二組あるようなところくらいの区間で、どんなものをみんなが要求しているのかをまとめるといいと思っています。氾濫原、河原、堤防の外まで含めたらどんな像がそこに組み込まれるかについて。矢作川は、全部が全部アユの川じゃないし、全部が全部生き物の川じゃない。だから、どういうリクエストが、どういうふうな瀬淵構造があるようなところで、それぞれに応えられるんだらうか？ということをお話整理してもいいかなと思っています。でも、これは市民部会の光岡さんが数年前からおっしゃられていたことなんですよ。

川の理想像を描くとき、今の川部会がある意味救われているのは、多くのリクエストが生き物に行くかもしれないけれど、「人が」といふところもあるし、「アユが」といふところも対応できるメンバーがそろっていることです。どれくらい、どの程度川の中に入れ込めるんだらうかというようなことは、やりたいですね。それが描かれると、それには土砂が必要です、流量が必要ですということをお話整理して、それを上流に求めることができる。つまり、ダムとか土砂水理、土砂とか水にリクエストするための整理ができてくるわけです。これは懇談会でやれる話なんです。

【防災意識について】

防災は、「あるところに住んでいる住民がどうすべきか」といふ話なんですけど、懇談会に関わっているNPOの方々は、川の中のことに関与している人が多いので、川の中で話が収まってしまいます。そのため、川部会でも流域を対象にして課題解決に向けた話し合いをしましょうとなると、周りの土地もエリアにして、つまり周辺地域の自治会とかも対象にする必要があります。しかし、発足当初はそのエリアの方々が対象になっていなかったんで、今、防災に関する話し合いをしない原因はここにあると思います。そこに関心をもっている市民の方々や団体がメンバーシップにあまりいないといふところが、防災に関する意見を押し上げてきませんでしたけど、近年は災害が多いので、懇談会の中で話しやすい状況にはあると思います。

近くで氾濫がおきたときに、ある学校では下校をどのようにしますか？といったような話を聞きに行くとか、あるいは、愛知県の「みずから守るプログラム」を実践しているモデルのところへ聞きに行こうとか、そういうものの情報共有はやってほしいと思います。これは、川を中心としたメンバーと陸側の人間に対してできると思います。例えばそれぞれの学校や団体、市町村が、今、川の防災に対してどのように向き合っているか、などです。メンバーではないけれど、ヒアリングに行くといふことで意見を聞いてみたり、他方の国交省と愛知県については、どういうオペレーションで、実際はどうなるんだ？といふ話をしてもらったりするなどが期待できると思います。

流域圏懇談会について、フリーコメント

懇談会のアウトプットとは、みんなの土台になるような成果になるといい、ということが今後の核になると思います。

懇談会の発足当初は、「アクティビティにこだわる」といふことがあって、いろいろとできなかつたといふのがあったと思います。アクティビティは最後は、それぞれのステークホルダーが落ち着かせることで、むしろ、懇談会では「共有できる」といふアクティビティで成果を上げる方がいいんじゃないか、ということなんです。

今後も、懇談会は共有できる場としての意義を持たせる、ということが第一義だろうといふ気がしています。アウトプットとしては、2つありうるといふ思います。一つは「懇談会でこれをやりました」といふこと。共有していることが形になっている、そしてそれをみんなが見られて、役立つといふものです。もう一つは、流域圏懇談会は河川整備計画に関連してあるものなので、そこで与えられている使命の中で進めるといふ話です。ただし、後者の場合だと川の管理といふ話になって、国交省としてやれるべきことをたくさんやりましたといふことになります。また、山部会・海部会をつくっている懇談会としては、少し意味合いが異なってしまうといふ思います。

懇談会の意義に照らすと、国交省に対して全て求めているような話ではない、つまり、河川管理者に全てアウトプットを求めるような懇談会ではないといふことです。課題を持ち寄った時点で、誰のものでもない課題だったらいいんですけど、たいていは誰かが関わっている課題だから、関わっている誰かといふいろいろとやり取りして、その誰かがより良い活動に活かされれば、それがアクティビティの成果だといふ話になるんだといふ思います。

野田賢司 さん

(矢作川環境技術研究会 事務局)

山部会 **川部会** 海部会 市民部会
 個人 市民団体 **関係団体** 学識経験者 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 今村 豊
 レポート作成者 : 今村 豊
 取材日 : 2020年2月25日(火) ※第9回全体会議前10:00~
 取材場所 : 西三河総合庁舎1階 待合室



はぎぼう

あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

野田さんは常に熱心な環境調査員で、関心事はまさに仕事と、それに直結した市民活動そのものです。その内容は
 ①環境モニタリングシステム ②水環境を中心とする環境保全活動全般 ③汚濁防止対策をはじめ環境技術全般
 ④山・里・川・海の健全な水環境の確立 ⑤生物多様性の保全 ⑥現在参画・活動進行形の市民活動 ⑦自然地理
 から歴史・文化・民俗に係る地域調査研究 ⑧持続可能な土地利用計画・管理・地域づくりです。

その関心の広さと活動内容は圧巻の一言で、これだけ地域に関連した分野に広く関わり、かつその知識・知見を活かした市民活動を実践されている方は、とても希少でしょう。野田さんにとっては、その地域が丸ごと人生の対象になっていて、いわゆる本業の調査活動が、ライフワークとしての市民活動に見事に昇華されている、と言っても過言ではないでしょう。

あなたにとって、流域圏懇談会とは？

①懇談会の構成一員として、矢作川環境技術研究会活動に関わる矢作川流域圏内及び関係者の情報収集、並びに関係する様々な主体への情報発信 ②新知見の収集 ③矢環研活動への利用・調整 ④矢環研事務局の立場からの意見交換・提案・聞き取り ということです。

つまり、野田さんにとっては前項の関心事からも推察されるように、当懇談会に参加して多くの方々との出会いから様々な情報を入手して、自ら取り組まれている市民活動に反映させていく、という姿勢が明確です。矢作川流域圏懇談会の最も理想的で有意義な活用方法と言えるでしょう。また、野田さんは山部会をはじめとして、各部会、全体会議等で非常に緻密に計画された調査等について、自ら行動・実践されたことを踏まえたご自分の知見を発言されるため、非常に説得力があります。多くの皆様がそうした実感を持たれていると思います。ただ、単に知識とした得られた事項を語るのではなく、野田さんの場合は、常にそこに行動・実践が伴っており、そこから得られた知見を語る、というスタイルが確立されています。これは、調査員としての必然性なのかもしれませんが、「行動・実践して語る野田さん」という超強力な当懇談会メンバーの一人と確実に言えるでしょう。従って、地域の課題の解決に向けて市民参加で取り組んでいる当懇談会にあって、調査された実態を踏まえて課題解決に向けた方向性を示すことができるとも重要な人材で、今後もあらゆる場面で野田さんの説得力のある知見が必要とされています。

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

①各主体が持つ情報、問題、課題の開示 ②懇談会の意見交換の計画や管理面への反映 ③矢作川環境技術研究会の活動発展に寄与する ということです。

つまり、野田さんは端的に言うと、当懇談会への参加を通して流域の課題を明確にし、それぞれの課題に対して幅広い意見交換を当懇談会で行って、その意見交換の成果を、ご自分が主体となって活動されている矢作川環境技術研究会において展開していく、と総括できると思います。やはり、ここで明確なのは、ご自分が事務局を担当されている矢作川環境技術研究会において、当懇談会で得られた知見や情報をもとに、地域の課題解決に向けて行動・実践するその姿勢です。単に、当懇談会の話し合いに参加されているのではなく、当懇談会で得られた知見は行動・実践して地域に還元する、そこまで当懇談会に期待し、活用されている野田さんは、当懇談会メンバーの鑑と言っても過言ではないでしょう。

また、野田さんには山部会で配布した「流域ものさし」を実際の観察に使用していただきました。正に、当懇談会を有意義に実践的に活用されている第一人者と断言できます。

流域圏懇談会についてのフリーコメント

① 課題、サブ課題、意見交換のプロセスを明確にする ② 話題提供、情報提出意見交換に、客観的材料をできる限り持ち寄ってほしい ③ 現場や参考事例、実施結果を見に行く、よく検討することをいとわない ④ 分科会が多すぎるのではないかと ⑤ 地域や各主体の立場などがあり、一体化は難しいが、意見のすり合わせは意見交換を進めることで、進展させられるのではないかと ⑥ 具体的な課題検討にステップアップできないか ということです。

つまり、野田さんは、やはり行動・実践して具体的に地域の答えを出していくことを重視されています。検討材料や判断材料という素材がなければ、検討はできません。なので、当懇談会に参加している以上、各人がそれぞれの問題意識に基づいた素材を持ち寄ることが大切だと感じておられます。さすが、調査員を仕事にされている方なので、対象から何かを引き出す嗅覚に優れていると思います。現在目の前で展開されている事象を切り取って、当懇談会上で意見交換し、その方向性を見極めた上で、野田さんなりに行動・実践していく。極めてシンプルなプロセスですが、単に話し合いのみで終わらずに、課題解決に向けた何らかの形にしていく。それを実践し、またそれができるといことが野田さんの真骨頂と言えるでしょう。懇談会のメンバー一人ひとりが見習うべきとても素晴らしい姿勢だと思います。

取材を終えて

今回は特に川部会を中心にいわゆる緻密な調査の「野田流」で、その調査と行動力に基づいた見事な知見で、圧倒的な存在感を放っている野田さん取材させていただきました。やはりと言うか、さすがと言うか今回の取材にあたり、野田さんらしい大変多くの貴重な活動記録と実績資料を持参され、その「圧倒的な野田さんの歩み」を拝見させていただきました。取材記事に記載したとおりですが、そこには調査して、行動・実践して発言する野田さんの姿がありました。皆さんも感じるとおり、非常に温厚な印象を与える野田さんですが、その知識吸収欲やその知識・知見に基づいた持論の鋭さと行動力には、誰もが一目を置いています。その活動の源泉は、恐らく深い地域愛だと推察されますが、その言動にとっても真摯なものを感じるのには、私だけではないでしょう。このような資質を備えた野田さんの知見が、この矢作川流域の課題解決に向けてこれからも大いに発揮されることを同志として、とても期待しています。

矢作川 山々を起つ

降る

滴る

養う

出る

躍る

憩う



'17.8.21 第35回海部会WG(トンボロ干潟)
野田さんが採集した生き物と矢作川流域ものさし



青木伸一さん

(東京大学大学院農学生命科学研究科 教授)

山部会 川部会 **海部会** 市民部会
個人 市民団体 関係団体 **学識経験者** 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 高橋伸夫
レポート作成者 : 高橋伸夫
取材日 : 2020年02月25日(火)
取材場所 : 西三河県民事務所10階会議室 控室



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

1993年10月から2012年03月まで豊橋技術科学大学工学部に勤務し、2012年04月からは大阪大学大学院工学研究科に勤務。

専門は土木工学の一分野である海岸工学で、沿岸域の開発、防災、国土保全、環境保全など、人と海岸との関係に関心がある。港や海岸堤防など海辺にある土木建造物、砂浜、水環境などを研究対象としている。

あなたにとって、流域圏懇談会とは？

海部会の全体的な経緯等は「各部会10年の振り返り」の中に記した。

流域圏懇談会には、当時の豊橋河川事務所長からのお声掛けで参加したが、自分のフィールドは矢作川から離れた三河湾や遠州灘等が主体であった。海も山も含む川の流域圏の懇談会ということで、その漠然とした目的は理解できるものの、海部会として正直何をテーマに議論すればよいのかも解らず、全くの手探り状態で取り組むことになった。当初は豊橋河川事務所の担当者であった溝口さんの熱意に引っ張られて動いていた時期もあったが、それぞれに価値観の異なる組織や集団、個人の集合体ということで、自分の研究テーマに関係のある情報に限らず、多様な立場の方々から多様な視点での意見を数多く聞くことができたことは貴重な経験となっている。多様な価値観が混在していること、解決が困難な問題が多いことなどで、最初からこれらを無理に纏めようと思わない方向で対処してきたが、海部会の座長としてどれだけの仕事ができるのだろうか？とか、もっと積極的な対応ができたのではないかとといった反省もある。この10年の活動が、知らず知らずの間に、それまでの自分の考え方に影響を及ぼしていると感じている。

このように山から海までの、全ての立場の人々が集まっている集合体で、それぞれの意見を聞くことができる場は、国内を含め他には全く例が無いと思う。こうした場でいろんな意見を聞き、自分の意見も発信できることが、矢作川流域圏懇談会の存在意義そのものであると言える。いろんな立場の方々の話を聞くと、こんな見方もあるのかと気付かされることも少なくない。自分のやってきたこと、やっていることについても、いろんな立場の方の意見を聞くことで、多様な視点から見た評価を確認することもできる。

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

山・川・海の連携についてはこれまでに何度か提案されてきたが、ほとんど実現していない。今後はその具体化や連携の強化を優先課題として、各部会の問題点を流域圏全体が共有して議論することが大切である。部会を超えて議論することで、解決に向かう問題点は少なくないと思われる。

流域圏懇談会の成果が出るのはこれからなので、今後も継続することは当然であるが、同時に関係者の年齢も高くなっていくので、今後は参加メンバーの若返り(世代交代)も重要な課題である。幸い最近は大学生を中心に会議に参加する若者が見られることから、こうした人材の育成に注力するべきである。

流域圏懇談会について、フリーコメント

一般論として、川が予算等で行政の手厚い補助を受ける構造になっているが、河川部門だけで流域圏を十分カバーすることの難しさを実感せざるを得ない。流域圏懇談会では、流域圏として取り組むことの意識を流域全体で共有して、将来何らかの問題が生じた場合にこのことを役立たせることが、これまで継続してきた矢作川流域圏懇談会の意義そのものである。今後もいろんな問題を解決する場合に、ボトムアップで物事を動かす原動力になるものと思う。その意味でも矢作川流域圏懇談会は今後も継続されるべきであると思うし、継続しなければならないと思う。

矢作川は国内の基幹産業を支える役割や、矢水協の実績などをみても、国内の河川管理について先駆者ともいえる役割を残してきた河川である。その意味でも、この川の価値や流域圏としての取り組みの意義を全国に発信していくことは重要と考える。

海部会では、この10年の間に大きな問題が発生している。それは、流域圏懇談会ができる少し前から漁業の構成に大きな変化があり、稚貝放流によるアサリの漁獲量が増大していた。当時の漁師は「後継者の心配など全くない」と豪語していたが、海苔養殖経営体の数が激減していたことから、当時でも「もしアサリが採れなくなったら大変なことになるぞ…」とは感じており、現在それが現実となっている。

かつての三河湾は富栄養状態で、アオサがたくさん発生しており、蒲郡市では「ラグーナが建設されたことで夏に流れ着くアオサの腐った臭いを嗅ぐことがなくなって良かった」などという話もあった。当時、夏の三河湾の色はコーヒー色であったが、最近は夏でも赤潮を見る機会が少ない。特にこの10年で海の水は急激に透明度が高くなり、その意味では明らかにきれいになった。三河湾では河川の流域に人口密度の高い都市が少ないこともあり、現在の流域下水道の処理能力は、海に流入する物質の量をコントロールできる範囲にあるといえる。

この10年間で、自分としても海を見る見方が変わった。以前は汚い海をどうやってきれいにするかということを第一に考えていたが、現在では透き通ったきれいな海ではなく、内湾では多少汚く見える海が豊かな海であるということ。要は工業廃水から排出される重金属や化学物質、人間生活から排出される合成洗剤などが問題であって、本来生物から排出される有機物は、下流に生息する野生生物にとって重要な栄養源であることを認識させられた。海ゴミについても、人間活動で排出されるプラスチックなどのゴミと、海藻など生物由来のゴミとを明確に分けて認識することが大切で、生物由来のものは、生態系にとって必要なものであることを広く社会に認識させることが重要である。



'17.8.21 第35回海部会WG(トンボロ干潟)



鈴木輝明 さん

(名城大学大学院総合学術研究科 特任教授)

山部会 川部会 **海部会** 市民部会
個人 市民団体 関係団体 **学識経験者** 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 近藤朗、高橋伸夫、洲崎燈子
レポート作成者 : 洲崎燈子
取材日 : 2020年3月7日
取材場所 : 名城大学大学院総合学術研究科鈴木研究室



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

専門は水産海洋学(内湾域の貧酸素化に関連する親生物元素の物質循環、赤潮発生に関わる動物プランクトンの摂食圧、干潟・浅場やアマモ場の物質循環)。農学博士。2010年まで愛知県水産試験場長。名古屋市生まれ。著書に『水産の21世紀 海から拓く食料自給』(分担執筆 京都大学学術出版会)、『環境配慮・地域特性を生かした干潟造成法』(分担執筆 恒星社厚生閣)など。

自分の家は渥美半島の赤羽根で代々漁業をやっていた。小さい頃から海でウミガメの卵掘りや魚釣り、アサリ掘りをやっていた。四つ手網を持ってカレイの子も捕った。自分の子も近大の水産に行ったし、弟の嫁の実家も魚屋をやっている。だから漁業者を悪く言う人は好かない。

1973年に京都大学から東北大学の大学院に進学し、その後愛知県水産試験場に就職した。水試にいた頃から愛知や三重の漁業者と付き合いがあり、悩みや相談を持ちかけられていた。三河湾は依然として開発が進み、いろいろな意味で環境劣化が進んで漁業にとって厳しい状況にある。

名城大学大学院に総合学術研究科ができたとき、文理融合の理念で社会との連携を進めることになり、大学から県を通じて私に教員の依頼があった。兼務で土曜に講義を行うようになった。今は主に社会人の博士後期課程の院生の指導を行っている。

【海の栄養塩不足問題】

どうしたらもう少し魚が獲れるようになるかということに関心を持っている。最近特に問題なのが、いて当たり前の生物がいないこと。かつては春にアサリやコウナゴが獲れて活気づいたが、今はそれが無い。

海の水は水質としてはきれいになったが、そのことだけが注目されている。「きれいな海＝豊かな海ではない」ということは自分が言い始めた。

海は本当に激変する。かつては三河湾に大量のカモが飛来していた。海が鳥で埋まっているのが日常だった。埋め立てで干潟がなくなったことで貧酸素状態になり、魚や貝が死んだ。このことから干潟の埋め立てを抑制する意見が強くなった。浅場をつくれれば一時的に魚や貝が獲れるようになったが、また獲れなくなり、アサリの漁獲量は2万トンから2千トンに激減した。コウナゴも5～6年貧漁が続いている。毎年せつかく稚貝を撒いているのに、栄養不足でだめになってしまった。

矢作川だけでなく伊勢・三河湾のスケールから言うと、海に陸域から流れ込む栄養塩が減っている。主な原因は下水道の整備と農業の衰退による肥料の減少。そういうことで魚が獲れない、貝が獲れないということになる。

流域圏の問題は複雑で、しわ寄せは海に来る。生き物は食生活が一番大事。食べているものの質と量が変わると生態系はとたんに変わる。昔の農業は排泄物を回すなかで成り立ってきた。そういう物質の流れの中で、海の物質生産は豊かだった。昔の栄養塩のインプットは、ストックではなくフローだった。量が少なくても、循環していれば意味がある。干潟はもともとそれがセットで残っている唯一の場だった。

海はすぐに変わるので、適正な処置をすればすぐに戻る。戻らないのは山である。

【下水道管理運転への提言】

海に入る栄養塩を増やすために、農業肥料を増やすという事はできないが、下水道を管理することは可能である。当面は法令に準拠しながら、栄養塩の総量削減や類型指定を見直すべきではないか。これが現実路線。しかしそう言うと、「赤潮が出たらどうするか、貧酸素化が進んだらどうするのか」と言われる。植物プランクトンを間引く生物やその生息場所が健全であれば、いくら栄養があっても赤潮にはならない。赤潮になるか、腐って貧酸素化するかどうかは栄養のレベル以上に、海自体の食物連鎖が正常かどうか大きいということを知らない。それは現場を知らないということ。こういうことを水産系の学者が知っているのが問題。

今、全国的に海の栄養が不足し、偏っている。それから推測だが、硫化水素が出るような厳しい貧酸素が常態化し改善されないのは、鉄、ミネラルの減少のせいである可能性がある。鉄があれば硫酸還元まで行かない。そうすれば多少貧酸素化していても生き物は生きられる。今までは鉄が豊富にあり硫化鉄になって、硫化物が出なかったからギリギリの手前で止まっていた。それで貧酸素に強い生き物がいられたが、今はそれもない。下水道というのは最終的に鉄も含め有益な元素も、懸濁物として全て落としてしまう。これまで川から流れ込んでいた微量の金属イオンまで落としてしまってるんじゃないかと最近言われている。ただまだデータがない。

2017年から下水道の季節別管理運転ができるようになったのは、前漁連会長が「最近魚がやせていることやコウナゴが獲れないこと、海苔の色が出ないのは海水の栄養不足ではないか」と言い、知事や地元出身の国会議員(環境省の副大臣)に働きかけたのがきっかけ。

管理運転では下水処理水の栄養塩濃度を増やす時期を10月にしているが、9月、できれば8月にしてほしい。そうすることで秋の植物プランクトンを増加させ、冬場の植物プランクトンが減る時期をカバーできる。3月の植物プランクトンのブルージング(増殖)の時期まで持ちこたえられるようにできるといい。今年は6年ぶりに潮干狩りができるのではないかとされていたが、だめだった。ちょっと栄養環境が変わると、海の生物は生きるか死ぬかの状態に追い込まれるということ、陸の生態学者はわからない。

【海の研究者の課題】

今、海の研究者が育っていない。現場に足を運ばない頭でっかちの者が多い。行政マンにも、漁業に関わろうという気概が薄れている気がする。いわゆる現場系の学者先生はいるが、これも頭でっかち。ステイクホルダーと話し、一定の妥協をしながら話を進めていかなければいけないのに、現実的な話ができない人が多い。

海以前に、川自体の豊かさが損なわれている。このことに対する研究なり活動を、5年や10年といったなるべく短い時間でやっていかなければ漁業者がいなくなる。そういう危機意識の人が少なく、皆気長に悠長に構えている。

現場をよく知っている漁師に耳を傾ける研究者が少ない。漁師は研究者が好きじゃない。漁師の肌合う研究者も少なくなってきた。今の若い研究者には漁師と飲む人がいない。

あなたにとって、流域圏懇談会とは？ これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

流域圏懇談会の「山、川、海が流域で流域圏でつながる」というそもそもの考え方には大賛成。まさに今、それが問われている。



1973年取得の潜水士免許

ただ、豊橋河川事務所はこの懇談会をどのように考えているのか。例えばダムや砂の問題。干潟や浅場をつくるのには砂が必要で、砂は山、ダムには腐るほどある。この問題が大事だと言ったら、その問題は別の場所でやっていると言われた。しかし、これは本質的な問題。当初、事務所はこの問題の対応に苦慮していた。少し前の問題は矢水協さんの努力の主対象だった濁りから川、海を守るということだったが、今は栄養や砂といった難しい問題になっている。

当初は事務所はそこから逃げているという印象を受けたので、これはガス抜きの会かなと思った。とは言っても、海部会に出てくれば面白い人はたくさんいるから、まあ出てもいいかなと思った。開発サイドの人たちが催す会議というのは大なり小なりその傾向があり、それはある意味仕方ない。だからと言って本質を外すのはだめ。

海部会は碧南の下水道関係の人が出ていて、彼らが「海は栄養不足だからうまく管理しなくてはいけないのでは」等、いいことを言ってくれている。現場の事をよく知っている人が来る会になってほしい。

漁師は気が荒く、言葉や人当たりが苦手な人も多いが、毎日現場で操業していて感覚は確か。本当は組合長や漁連の関係者にもっと来てほしいが、彼らは「今ここで何か言ってもどうにもならない」という感覚を持っている。よほど強い信頼関係がないと出てこない。長良川の河口堰を論じる場にも漁業者だけは出てこない。行政や学者、水試にも不信感を持ってしまっているところがあるのではないかな。なぜかと言うと、これまで海がいろいろ変わってくる中で、漁業者だけが最後まで反対してきた経緯があるが、時としてマスコミ等に補償金目当ての汚名を着せられ、結局は泣き寝入りを余儀なくされてきたから。たいていの場合御用学者や行政は開発の影響は軽微であると言う。そういう図式の中にずっといるから、ほとんどの研究者、行政をあまり信用していない。長く付き合っ、心底わかっている人しか信用しない。その辺が山や川、都市の人とは違う。

海の人間だけでわあわあ言っても仕方ない。下水道や川の関係者と忌憚のない付き合いをしていかないといけないと思う。

懇談会では下水道の管理運転について、川部会の人に関心を持ってほしい。アユの不漁にも栄養不足が関係しているのではないかな。栄養塩は山と川の問題でもある。



'18.8.24 第1回合同部会(岡崎)
アサリの漁獲量減少と海の栄養塩に関する
研究事例の報告



高橋伸夫さん

(西三河野鳥の会)

山部会 川部会 **海部会** 市民部会
個人 **市民団体** 関係団体 学識経験者 行政 事務局



ヒアリング参加者 : 井上祥一郎
レポート作成者 : 井上祥一郎
取材日 : 2020年02月25日(火)
取材場所 : 西三河県民事務所10階会議室 控室

あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

ステンレスの製鉄会社に勤めていたが、60歳で定年退職して今年で10年目になる。
愛知県の「鳥獣保護管理員」であり、「絶滅危惧種等検討委員会」では鳥類を担当しており、環境省の「希少野生動物種保存推進員」、「モニタリングサイト1000・シギチドリ調査委員」なども担当している。
物心ついた頃から生き物に興味があり、小学校低学年の頃から、身の回りには常に鳥がいた。
23歳で西三河に移り住み、知らないうちに「西三河野鳥の会」の会長や「愛知県野鳥保護連絡協議会」の議長を引き受けることになって、自然保護・環境保護に足を踏み込むことになった。

あなたにとって、流域圏懇談会とは

2010年の設立時より参加しているが、どうして自分が国交省に誘われたのか分からず、当初はうさん臭い会ではないかと疑って対応していた覚えがあるが、2011年9月23~24日のバスツアーに参加したことでその認識が一変した。山川海をはじめ、さらに細分化された各分野で、現役で活躍している本物の人たちの集合体であり、それぞれに大きな問題を抱えて活動されていることが実感できたので、自分も何らかの形で役に立てる部分があるのではないかと気付かされたからである。自分は未だ何の役にも立てていないが、山川海の3部会の会議や行事には最も多く参加している者だと思っており、各部会の実情について最も知っている市民であると思っている。

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

それぞれの問題について、わずかずつではあるが改善の方向に向かっている、あるいは改善の努力が積み重ねられていると思う。これまでも3部会の意思疎通の努力はされているが、認識の違いなどによる横の繋がりの弱さは否定できない。今後は3部会の協力関係を強化することで、各問題点の改善を進めることが可能になると信じている。

流域圏懇談会について、フリーコメント

3部会の全てに出席している者として流域圏懇談会を見ると、それぞれの部会の中でそれぞれの問題に真剣に取り組んで活動している組織や団体、個人が実に数多く存在しており、目に見える実績が得られはじめている例もあればなかなか成果が得られていない例もある。その中には3部会が協力することで成果が得られそうな例も少なからずあるものと思われ、今後の展開に期待している。



2019年8月と12月、
いずれも佐久島にて



光岡金光 さん

(豊田市自然愛護協会)

山部会 **川部会** 海部会 **市民部会**

個人 **市民団体** 関係団体 学識経験者 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 吉橋久美子
 レポート作成者 : 吉橋久美子
 取材日 : 2020年2月8日
 取材場所 : 豊田市自然観察の森(豊田市)



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください。

逢妻女川のそばに住み、子どもの頃から川は身近だった。川で魚を捕まえて食べたり飼ったりしていた。今でも淡水魚の調査は「狩猟本能」が働いて(笑)、たくさん掴みたい、大きいのを掴みたい、と思いながら、楽しく参加している。豊田の魚類を長年研究しておられる梅村錫二さんは小学校中学校時代の恩師である。

大学卒業後は教育畑を歩み、中学校の技術・家庭科の教員などをしていた。梅村先生にお誘いを受けて豊田市淡水魚類研究会に入会。研究会は1992年に豊田市自然愛護協会(1974年設立)に加盟した。自分自身は2002年に愛護協会の理事になり、2010年から2017年まで会長を務めていた。自然愛護協会では、8つある部会のそれぞれの活動の他に、貴重な湿地の保全・保護活動や巡視活動、動植物保護に向けた提言などを行っている。

あなたにとって、流域圏懇談会とは？

豊田市自然愛護協会は、主に市内を対象に、それぞれの分野で活動している。山の経営や水源としての重要性、海のことまではなかなか視野に入っていない。それに対して、流域圏懇談会は対象とするゾーンが非常に広く、山川海、全てを含んでいる。山から海までのつながりについて、知らなかったことを改めて知ることができた。土砂にかかわる課題など、議論されている内容そのものが興味深い。

流域圏懇談会でなければ会えなかった方々と知り合えたのも良かった。普段話す機会がないような、その道のすごい専門家の方達や、国交省の方たちと気軽に話させてもらっていろいろ教えてもらっている。流域圏懇談会のおかげで、山川海という流域への視野も、人の交流の幅も広がった。参加させてもらってよかった。

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

河川工事や置土実験などは、それがなぜやられているか、あまり知られていない。川辺の公園などは、自然に配慮して、景観との調和を考えながら、地元の人達とも整備をやっているのもたくさんある。もっとPRすればよいと思う。見る人に知識があると見る目が変わってくるし、その活動がいつそう意義深い位置づけになっていく。多くの人にそうしたことを知らせることを流域圏懇談会での大切な課題としていくのもよいだろう。

結果として、いつそう川に愛着をもってもらえ、自然が豊かになっていくことにつながると思う。

環境問題の解決というのは多くの方が理解を深めていくことで進んでいく。それはいろいろな立場の人がやるべきことだが、流域圏懇談会はその大きな一角を担えると思う。膨大な費用や時間もかかり、そうそう簡単ではないが、やらなければ後退するばかりだ。

流域圏懇談会について、フリーコメント

2010年に流域圏懇談会に参加して10年になる。2017年に「市民会議」「市民企画会議」を統合した形で「市民部会」が立ち上がったが、なぜか自分が司会をすることが多い。専門的な知識のある方もおられるが、学問的な話は置いておいて、みんなが平場に居る感覚で「言いたい放題」ができるのがいい。山川海、3つの部会のつながりをつくる議論ができる。これを系統的に組み立てて懇談会全体で具体化できる方向に持っていかると良い。

僕は専門家ではなく、ただ川が好きで素人。素人が流域圏懇談会にいるのは結構いいことじゃないかなと思う。研究者の方や国の方は河川や土木の専門家なので系統的なことを承知している。素人は見た目やポイントでしかわからないが、助言を得たり、様々な意見を聞くことで、自分たちの活動の位置づけや価値もわかって、楽しく参加させてもらっている。



井上祥一郎さん

(伊勢・三河湾流域ネットワーク)

山部会 川部会 **海部会** **市民部会**

個人 **市民団体** 関係団体 学識経験者 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 高橋伸夫
 レポート作成者 : 高橋伸夫
 取材日 : 2020年02月25日(火)
 取材場所 : 西三河県民事務所10階会議室 控室



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

中・高校時代に生物部に所属して以降、大学、社会人を経て現在まで、生物に深く関わってきた。現役時代は中小企業の技術職として、雨水浸透、汚水処理、ヘドロ処理、たい肥化の技術提供をしてきた。全て生態系サービスの利用技術であったので、主要土木官公庁さんの採用技術分野の外側にいた。

技術士法に定められた“技術士資格”があり、技術士として相応しい経験技術か？高度の応用能力を持つか？公益確保の責務を負えるか？継続研鑽に努めるか？などを問う試験がある。試験では雨水浸透、汚水処理、ヘドロ処理、たい肥化の4つの技術を書いて、森林、上下水道、衛生工学、農業、水産、建設、環境、応用理学の8部門で資格を得ることができた。

官公庁が採択する技術は、大企業や業界の開発に頼る傾向があり、結果として高額な開発費用を費やすものになっているように感じている。言い換えれば、自分が学んだ技術は本流ではなく支流だった。林学を学んだ自分が、工学系の衛生工学や上下水道分野で活動できたのは、ほとんどが民間需要とのお付き合いで結果を残すことができたと感謝している。

定年を機に技術士登録事務所を移し、その時点で技術の棚卸しを行い、“流域環境修復実学”に纏めた。定年後、技術士業務を継続しつつ、愛・地球博の準備段階の頃から市民活動を開始した。2005年の愛・地球博から2010年の生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)まで、中部地方は環境問題に向き合い、豊橋河川事務所さんが“矢作川流域圏懇談会”を立ち上げられたのもこの時期である。

一昨年の春、技術士の役目を考えて“オモシロ技術情報資料室”を立ち上げ、市民の方達が将来を決めるのに必要と思う技術情報の収集と発信を始めた。海部会でしつこく話題提供している高活性食物連鎖(魚介類に繋がるもので、クラゲ類に繋がるものを低活性食物連鎖と呼ぶ)に繋がるシリカ供給、その他、プルトニウムを燃して消しつつ核分裂エネルギーを供給する受動的安全炉のトリウム熔融塩炉、シカ害対策としてのオオカミの再導入等、行政やマスコミがほとんど取り上げない事項を話題にしている。

あなたにとって、流域圏懇談会とは？

自分が技術市民として、流域の生の情報を得られる勉強の場所である。また、ライフワークの高活性食物連鎖環境の実現を目指して、豊かな三河湾にする技術提案をし、多様な視点からの意見や評価を確認させてもらえる場所である。

山部会や川部会で、シカの食害による森林の荒廃や、イノシシによる農作物被害等が話題になれば、シカ、イノシシ肉のジビエ利用と並行して、捕食者オオカミの再導入を選択肢の一つとする意見交換が行える場でもある。ジビエとしてのイノシシについては、豚コレラ(今は豚熱)による利用制限もある。岡崎森林組合の方が、日本オオカミ協会の講演会に出席されたとお聞きしたこともあり、情報量の少ない中で、情報交換の場としての存在意義もある。

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

山・川・海の連携について、市民部会が更に盛んになるべきである。流域の市民に対しては、雨の降り方の変化による大洪水発生の予測なども必要になってきた。自分は新しいダム建設には批判的であるが、東海豪雨の際、矢作ダムが流木を止めたことに見られるように、ダムの光と影の部分が気候変動で変わってきたように感じている。こうした情報の提供も、多くの市民の皆さんに矢作川に興味を持ってもらう上で大切なことである。

海部会では、窒素・リンを増やせば豊かになるという前に、窒素・リンの削減の途中で、漁獲にどのような変化があったのか？富栄養化の折に盛んに言われた“レジームシフト”は、窒素・リンの削減を緩和する段階で、どのように表れるかの識者からの情報供給を期待している。

シリカについては、持論なので、今後も発言を重ねたい。流域を繋ぐシリカの収支についても是非追求していきたい。映画「あらかわ」では“昔は、水田でも川でも海岸でも至る所に湧き水があった”という漁師の台詞で終わっている。豊かな湧き水のある矢作川流域にするために微力を尽くせる場としての懇談会にも期待している。

流域圏懇談会について、フリーコメント

自分自身は矢作川ではなく庄内川流域の住民であるが、矢作川流域圏懇談会には、溝口さんに誘われて最初から参加している。現時点で山・川・海の3部会の連携が希薄な理由には、多様な要因があると思うが、とりあえずは市民部会の中で話し合った上で、地域部会に展開していく方法が最も現実的だと考えている。流域圏の現状について関心のある人が増え、それが市民の常識になれば、大風呂敷だが、国内だけでなく、稲作文化で共通する東南アジアの全域にまで広がることも夢ではない。



'18.12.19 第39回海部会WG(西尾)



山本薫久さん

(萩野NPO結の家)

山部会 川部会 海部会 市民部会
個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 事務局

ヒアリング参加者 : 沖 章枝
レポート作成者 : 沖 章枝
取材日 : 2020年6月18日
取材場所 : 豊田市産業文化センター



お仕事やご活動、関心のあることについて

山本薫久さんは1997年に地縁血縁のない旧足助町にIターン移住。きっかけは勤務していた名古屋市の小学校で児童の主体的な願いを実現させる実践を通して「個人のミッション」を持ったこと。それは自給自足を基本にして、身の回りのことを全部自分でできるようにして人生を全うしたいという思いで、土地を求め家を建て当地にいられた。以後、下記「肩書一覧」にあるような活動を20余年邁進されてきた。居住地域外ではあったが豊富な活動歴と幅広い人脈が評価されて、移住者ではあったが自治区の副区長に抜擢された。

足助地区東部の萩野自治区は7つの自治会(桑田和、菅生、竜岡、玉野、ニタ宮、怒田沢、川面)で構成される小学校区で、現在住民は230世帯、小学生は25人であるが自治区面積は1456ヘクタールと広い。

2019年に設立された、萩野・持続可能な地域づくりをめざす事業「萩野NPO結の家」の代表に就任する。

「結の家」の活動は5つのプロジェクトで構成されている。昨年実施した活動を紹介します。

- ①COCO暮らっそプロジェクト…トンカン木工塾を4月～翌年3月まで第4土日に開催。移住定住をめざす家族の交流や大工技術を身につけてモノづくりの楽しさを体験する。スタッフとして地元大工の河合定泉さんや設計士の島好常さんがいる。8家族で始まって、2家族が家を建てて移住したことで住民の目に見える形になってきた。
- ②田んぼプロジェクト…萩の田んぼ・おじさんの田んぼ・みんなの田んぼ・ママの田んぼなど4チームがあって、休耕田を復活させて米づくりをしている。無農薬・無肥料でやっているが、それぞれのグループの話し合いで自由な栽培方法にしてよいことにしている。農業用機械は共有している。既に7反ぐらいを田んぼにしている。地域の関係人口を形成するほどになってきた。
- ③森林プロジェクト…2019年6月、「はぎの森の健康診断」を実施。10チーム80名が参加。10月に報告会を開催し、30名が参加。2019年度は12月から3月まで、半農半林のメンバー15人により地元の三角山で265本の間伐を実施。一部材を「結の家」工房で使う。萩野地域では森林ボランティア2グループが作業をしている。
- ④新しく誕生したプロジェクト「トンカン子どもの森」…トンカン木工塾参加家族の子どもたちが楽しく過ごすよう広場でスウェーデントーチやバーベキューを試みた。「枝オカリナコンサート」も開催できた。
- ⑤梅プロジェクトから萩野手作り会(醤油づくりにチャレンジ)結成へ…地域の採取されない梅の実を収穫して、萩野小学校の住民活用スペースで梅肉エキス作りを始めたことから手作り会が結成された。2020年から醤油づくりを開始。

プロジェクトの他に、澁澤寿一氏を招いて「なぜ里山…」の講演会や先進事例学習会などを開催している。

2005年にNPO法人「都市と農山村交流スローライフセンター」を立ち上げ、豊田市農山村地域において農都交流と持続可能な地域づくりに先駆的に取り組んだ。2019年に法人解散し、現在は地域年誌「新スローライフ通信」の発行のみを行っている。

「肩書一覧」

- ・萩野NPO結の家代表(2019年～)
- ・萩野自治区副区長(2020年現在)
- ・NPO法人「都市と農山村交流スローライフセンター」代表理事(2019年終了)
- ・とよた都市農山村ネットワーク代表(2018年終了)
- ・一般社団法人おいでんさんそん セカンドスクール部会代表
- ・矢作川森の健康診断実行委員会委員
- ・森林インストラクター、無農薬有機肥料や自然栽培のお米づくり
- ・とよた森林学校事務局メンバー
- ・森林ボランティア支援 半農半林隊
- ・豊田市総合計画審議会委員(2006～07年)
- ・豊田市森づくり委員会委員(2005～19年)

あなたにとって、流域圏懇談会とは？

これまで山部会と市民部会に所属し、実際に森林にも関わってきたので、行政サイドに影響を及ぼす流域圏懇談会のようなどんとした仕組みがあることはいいなあと感じてきた。現在は自分が暮らしている地域の活動に重点を置いているが、地域が持続可能な社会のあり方を求めるように、流域でも一緒になって考えていけたらいいと思う。山川海、衣食住やエネルギーも含めた連携や関係性を探っていけたらと思う。

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

昨年12月に市民部会ではマイクロプラスチックの汚染や農薬の水汚染が話題になった。その時、関心の高い若い世代など幅広い人を呼び込む勉強会や視察をやろうとなった。今年度早速に実施することになった。

マイクロプラスチック汚染の元凶については、化学繊維だけでなく、化学肥料の「ひとまきくん」の容器のプラスチックが分解されずに川から海にいて、世界の海の生物を追い込んでいることが知られていない。日本ではあまり啓蒙もしていないし、使用する農家さえ影響を及ぼしていることを知らない。少しずつ認識を高めるしかないと思う。実はいま関わっているたんぼグループには情報は流している。情報を「まあ見ておいて」という程度なんだけれど、知っている情報の発信はしている。知って実際はどうかは個々の判断に任せるといふフリーハンドがいいと思う。どんなこともやらされ感が出てくると面白くなると思う。

流域圏懇談会についてフリーコメント

持続可能な社会とは「地球環境や自然環境が適切に保全され、将来の世代が必要とするものを損なうことなく、現代の世代の要求を満たすような開発が行われている社会」という。持続可能な地域とは何かを考えながら実践をしている。一緒にやっている人たちは同じ地域に住む仲間なので、みんなの中にいることがとても嬉しい。何かを私の方からやりましょうと言って始めるのではなく、仲間の中から「こんなことがやれるといいね」、といていろいろなことが始まっている。味噌は各家庭で作っているのでみんなで醤油を作ろうとか、梅がたくさんなっても収穫されないから梅肉エキスを作ろうといった手作り会も誕生している。

流域圏懇談会と地域づくりのことでいろいろな交流ができるといいと思う。地域自治と分野別自治が確立しないと持続可能な社会の実現につながらないと思うので、それをどうつくっていくかみんなで話し合い、流域全体で持続可能な社会をめざせたらと思う。三河湾の魚を食べ、近くの木でいろいろなものが作れ、身近なたんぼや畑で地域の人たちや家族で作った米や野菜を食べられたらいいと思う。ここでの老後の暮らしも計画している。地域の自然と人間関係を維持したままで終われたら最高だと思うから。



萩野の30代から50代の若手がたんぼの担い手



トンカン木工塾



三角山の間伐



萩野森の健康診断



溝口敏明 さん

(一般社団法人 中部地域づくり協会 上席調査役・地域づくり技術研究所 主任研究員)
(元 国土交通省 豊橋河川事務所 事業対策官 2010～2012年度)

山部会 川部会 海部会 市民部会
個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 **事務局**

ヒアリング参加者： 近藤 朗
レポート作成者： 近藤 朗
取材日： 2020年1月16日
取材場所： 中部地域づくり協会(名古屋市瑞穂区)



まず、筆者が歴代の矢作川流域圏懇談会事務局(豊橋河川事務所)担当者に聞いておくべきこととは何か？
(参考までに、今までの担当リーダーの系譜(2010～2019年度)を以下に示す)

10年を経て改めて矢作川流域圏懇談会は、今までに類を見ない画期的な組織であると認識している。そもそも、河川管理者の立場からすれば、自らが責任を負える範囲は河川区域内であり、それを越えた流域全体の範囲(山、海など)をも議論する場など、積極的につくろうとはしないはずである。なぜ、それができたのか？

表面上は、2009年に策定された国の「矢作川水系河川整備計画」に記載されたことにより動き出した懇談会であるが、かなりの英断である。ちなみに国の他水系では聞いたことがない取組。その導入経緯と共に、多くの関係者が関わり、相当煩わしい作業になるであろう事務局組織(ほぼ2～3年で担当者が変わる)での苦勞と継承過程について、歴代担当者の方々(3名)に聞くこととした。(以上、近藤の視点)

以下取材を通じて、設立時に関わった溝口事業対策官には、それなりの思いがあったことがわかる。ではその後、職として任務を継承された後任の方々は何を考え、いかに組織として対応したのかが重要なテーマとなるはず。

【歴代担当者】

2010.4月～2013.3月 **溝口敏明 事業対策官**

- ◇ 2010.8月28日に「矢作川流域圏懇談会」設立総会が開催
- ◇ 2011.9月「矢作川全てのバスツアー」開催、各部会でも現場へ行き、情報共有を行う

2013.4月～2015.3月 **西原均 事業対策官**

- ◇ 2013年度より「山村再生担い手づくり事例集」調査が始まる

2015.4月～2017.3月 **大森正昭 事業対策官**

- ◇ 2015.9月 初の「山と海の合同部会」を西海市幡豆地区で開催
- 2017.4月～2018.3月 **松山康忠 事業対策官、服部朋悦係長**
- ◇ 2017年度より(山村再生担い手)事例集交流会が根羽村からスタートした
- ◇ 2017年度より矢作川感謝祭など流域連携イベントへ参加

2018.4月～2020.3月 **神本崇 事業対策官**



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

- 1973年に中部地方整備局に入局、2015年3月に退職するまで概ね河川系の業務に携わっていた。(42年間勤務)
- 2000年頃、中部技術事務所時代に実施した官民協働による「めだかの学校」調査が縁で市民団体「リリオの会」と関わり、その後に伊勢・三河湾全体の市民団体と協働作業がスタートしていく。
- 豊橋河川事務所には、2回勤務。2005～2006年度に調査課長として赴任、この時はどちらかと言えば、設楽ダム計画など豊川水系の分担が大きかった。当時の試みとして、豊川水系に関わる市民、関係団体(漁協、森林組合、学校等)とのネットワークが出来ればと思い、緩やかな1回/月の誰でも参加できる「飲み交流会」のような場をつくって意見交換を実施。これが「流域圏」に繋がる。
- 2度目が2010～2012年度の事業対策官。河川法改正などの時代背景もあるが、矢作川整備計画策定に向けて流域の意見を十分聞いた結果、流域圏内の山川海にわたり陸域から水面まで管理権限を越えた課題が膨大に出され、流域圏一体の取り組みについて記載された。こんな組織が出来たら課題は大きく改善されると思った。

あなたにとって、流域圏懇談会とは？

【懇談会設立まで】

私が2度目の豊橋河川事務所に赴任したのが、2010年度から。その前年度、2009年7月30日には矢作川水系河川整備計画が策定されており、その中には「矢作川流域圏懇談会」設置が既に盛り込まれていた。これを決定した流域委員会の委員長は、辻本哲郎氏（現在の矢作川流域圏懇談会座長）であり、最終責任者ということになる。何故このような場を設置することになったのかと言うと、当時国土交通省が進めていた大規模河川改修やダム計画に対しては市民などから猜疑心も持たれており、様々な批判を受けていたことも背景にある。実に様々なメンバー、セクターが参加していた流域委員会において、河川や流域内における課題を挙げてもらった結果、これが1,000以上にも上り、テーマごとに整理してみたら河川管理者だけでは解決できないものが大半であった。では、どうしたら良いのかという話である。

それでは、流域圏に関わる多くの関係者、機関を集め課題解決を図るための意見を聞く場、議論する場をつくらうということとなり、この「懇談会」が提案されたと思う。河川管理者である豊橋河川事務所は、その中で決定権限は持たないこととし、様々な課題を土俵に乗せ関係者を集め議論する場を設定、運営することとした。あくまで、ここに参加する関係者や市民の皆様のお手伝いをする事務局を担うこととしたのである。

私は、懇談会を立ち上げるために来たと言っていい。赴任から懇談会設立までの期間は、ほぼ5か月しかなく、参加者公募から枠組み構成など設立総会（2010年8月28日）まで奔走した。実のところ、懇談会については、「凄いことを整備計画に盛り込んだな」という感覚であり、自分としては今までの経験（豊川水系でのネットワークづくりなど）を踏まえた集大成と位置付ける。やることが全ての課題解決につながる訳だから、これはまさしく自分が望んでいた仕事だ、「よし、何とでもつくてやろう！」という気概で臨んだ。

参加者については、Web等公募もかけてはいたが、多くの人に聞き取りしながらその「多様な人々の考え」を形にした。現在参加しているメンバーが、当初から全て揃っていたわけではない。関係機関として、矢作川など川の漁協、海の漁協などにも声をかけさせていただいたが、特に利水関係者の呼び込みは難しく、参加してもらうまでに1年半は要した。多くの関係者、市民団体などが参加する場で「川の水を搾取する」ことを非難されるのが明白でイヤだ、という思いであろう。こういった方々にも地道に説得を続けた。海の漁協に対しては、海部会の鈴木輝明さんと共に説得した。

なおこの頃、国は矢作川流域圏を含む伊勢湾そのものを再生すべく、伊勢湾再生行動計画（2007. 3月策定）、及び伊勢湾再生推進会議を進めていたが、思うように進んではない。これと比べても、多くのセクターが参加し10年も続いてきた矢作川流域圏懇談会は、もっと評価されるべき取組だと思う。

【設立後・初期段階において】

懇談会メンバー、関係者とは、事務局として毎日毎日やり取りをしていた。これも大変ではあったが、とてもやりがいがあった。設立後の懇談会運営（地域部会、市民会議など）を軌道に乗せるため、そもそも懇談会自体が初めての取組であり、そのあり方・進め方・取り扱う課題を何にすべきかなど話し合うために、当初は会議ばかりであったと記憶している。

そんな中で、議論をするためには「まず現場に行こう！」という声が上がったのは、山部会からである。2011年には、「矢作川全てのバスツアー」など、各部会で現場体験を共有する取り組みが展開されたことは、大きな転換点となった。結局私は、3年でこの任務を後任者にバトンタッチしたのである。



「矢作川全てのバスツアー」開催
2011年9月23日～24日 明治用水にて

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

矢作川流域圏懇談会は、今までにない先進的な模範事例であり、このような取組がもっと全国に広がってほしい。私を知る限り、10年たった今でも全国の他の流域で同様な規模の事例はないと思う。是非、皆さんにもっとアピール・発信をしていただきたい。

現在私は、矢作川での経験をモデルに、庄内川水系をベースとした「伊勢・三河湾流域圏」での懇談会バージョンを、特色を生かしながら展開しているところ。具体的には、NPO土岐川・庄内川サポートセンター、矢田・庄内川をきれいにする会、土岐川・庄内川流域ネットワーク、リリオの会などを中心に頑張っている。また、誰でも30分で打てる投網教室を主催したり、岐阜県山岡の森林組合とも連携中、さらに長野県根羽村の古民家を「森の交流館」として開館し、都市部の方々(庄内川関係)に体験いただいている。

あの汚かった庄内川にも多くのアユが遡上し、さらにはシラスウナギも遡上してきた。河口ではハマグリも採れ始めた。

【追記】この取材後、溝口さんは、2020年4月より新たに建設コンサルタント会社((株)興栄コンサルタント)技術管理部長として就任。「岐阜県の会社なので、これからは木曾三川連携もめざす」とのこと。溝口さんからは、「皆様にお会いできる日を楽しみにしています」とのメッセージをいただいた。



春日井市主催会議で講演する溝口さん
2017年5月13日 春日井市内にて

土岐川・庄内川サポートセンターHPより



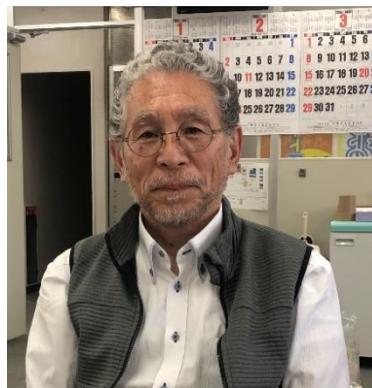
*取材後、溝口さんの退職後の活動を検索したところ、(国)庄内川河川事務所の河川協力団体に認定されているNPO土岐川・庄内川サポートセンターとして、溝口さんが発表されているレポート(2016年11月)を見つけた。活動目的として【山の民+川の民+海の民】「土岐川・庄内川の流域圏が一体となった地域づくりを図る」とあり、今なお当時の思いを続けているのであろう。



大森正昭さん

(一般社団法人 中部地域づくり協会)
(元 国土交通省 豊橋河川事務所 事業対策官 2015～2016年度)

山部会 川部会 海部会 市民部会
個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 **事務局**



ヒアリング参加者 : 近藤 朗
レポート作成者 : 近藤 朗
取材日 : 2020年4月8日
取材場所 : 中部地域づくり協会豊橋支所(豊橋市立花町)

あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

- 1957年2月、豊橋市生まれ。1975年に建設省中部地方建設局(現在の国土交通省中部地方整備局)に入局。
- 入局後、最初は道路分野からスタートしたが、退職まで特定の分野に偏っておらず、40年余の内、概ね道路が1/3、河川が1/3、その他ダム(設楽ダム、新豊根ダム)・砂防・海岸が1/3といった職歴、いろいろやってきた。これは非常に珍しいことだと思う。赴任地も愛知県をはじめ岐阜県、静岡県、長野県(天竜川上流河川事務所)まで広範囲にわたった。
- 設楽ダムには2回関わった。また1998年に休止(その後中止)された矢作川河口堰事業についても、1990年頃この事業による矢作川河口部の護岸整備・河道浚渫などを担当(安城出張所)した。さらに長野での砂防事業を担当するなど、山間地の森林組合や林業者、海の漁協の方々ともお付き合いさせていただいた。砂防、海岸事業(富士海岸)を含めて、これらの様々な経験が、後の矢作川流域圏懇談会の業務に繋がっていった。



設楽ダム完成パース(設楽ダム工事事務所HPより)



矢作川河口部(豊橋河川事務所HPより)

- 豊橋河川事務所には現役中3回赴任し、最後は2015年度～2016年度に事業対策官として着任、2年間懇談会の担当となり退職(2017年3月)を迎えた。その後、現在の一般社団法人 中部地域づくり協会に勤務することとなった。特に現在(取材時)は、設楽ダム付替道路事業の工事監理業務を担っている。これは中部地方整備局現役時代に関わらせてもらった事業でもある。時を経ての巡りあわせかな。

あなたにとって、流域圏懇談会とは

2015年度から豊橋河川事務所事業対策官として担当することとなったが、(他に類を見ないこの取組に対し) 実は戸惑いは特になかった。先に述べた経歴から、山から海に至るまで様々な分野に関わり、多くの方々と向き合うことができた。そこでわかったことは、「山・川・海の人たちが、みんな豊かになってもらわなあかん」ということ。このような経験を踏まえて、山・川・海の人たちが一堂に会する「矢作川流域圏懇談会」は、必要な場であり、「国の河川事業にとって無くてはならない大切な取組だ」と思った。流域圏懇談会の経験は一番面白かった。

また、流域圏懇談会設置の背景として、矢作川が「総合土砂管理計画」を策定すべき水系に位置付けられたことがある(下記参照)。この課題を取り扱うためには、土砂生産域である山からダム区域、河川、海岸、海までを総合的に見なければならず、これを推進するためにも流域圏懇談会には大きな意義がある。

【矢作川水系総合土砂管理計画】(豊橋河川事務所HPより抜粋)

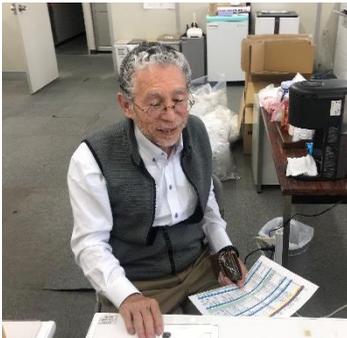
総合的な土砂管理については、2009年に策定された「矢作川水系河川整備計画」の目標とされている。矢作ダムでの堆砂の進行、中下流におけるダム等横断工作物による土砂移動の連続性の分断、河床・砂州の固定化や樹林化、河口干潟の減少などの問題に対して、「森・川・海」といった一連の水・物質循環及び生物の生息・生育環境に配慮しつつ、健全な流砂の連続を確保するための水系一貫の方策を検討することとして、2012年度(2013年3月)に「矢作川水系総合土砂管理検討委員会」(委員長:辻本哲郎教授)が設立された。



土砂管理の先進事例の見学(小洪ダム) 2019年秋

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

川は流域の通り道であり、われわれはもっと山と海のことをわからなければならない。そこで得られた課題を共有し、情報や知見などを隠すことなくもっと発信すべきである。「矢作川流域圏懇談会」が今後も長く続いて、その成果を広められるとよい。



中部地域づくり協会豊橋支所での大森さんへの取材風景

豊橋支所には、矢作川森林塾の小林智さん(元豊橋河川事務所岡崎出張所長)も在籍



流域圏懇談会について、フリーコメント (文責: 近藤)

国交省はよく嘘をつく。ダム事業や河口堰建設等の巨大プロジェクトに関して、このように厳しく批判される時代だ。大森さんは、これらの事業に携わりながら、丁寧に地域と向き合ってこられた方だと感じる。市民にもきちんと話をすれば、わかっていただけのことも多い。約束を果たせる組織でありたいという思いがあったとのこと。そのため、当時の所長とも随分議論を戦わせたらしい。建設事業に対する批判や逆風が、流域圏懇談会を設置した背景の一つだと言う。確かに同じことを初代担当の溝口さんも仰られていた。

今回の「山から海まで」という話を聞きながら、そう言えば懇談会ではじめて山と海との合同部会を開催したのは、大森さんの時代(2015年)だったなと思い出した。大森さんの「ボブ」という愛称がつけられたのも、確かこの合同部会ではなかったかな。



初めての山部会・海部会の合同部会の開催
2015年9月26日 西尾市幡豆にて 中央が大森さん



神本崇 さん

(国土交通省 豊橋河川事務所 事業対策官 2018～2019年度)

山部会 川部会 海部会 市民部会
個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 **事務局**

ヒアリング参加者：近藤 朗
レポート作成者：近藤 朗
取材日：2020年1月17日
取材場所：豊橋河川事務所



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

○1967年生まれ、岡崎市(矢作川右岸側)が故郷、矢作川の原体験がある。アースワーク(水と砂の造形)ができるような砂河川であった。幼少期には、親といっしょに砂で遊んだりした記憶があるが、今は樹木の繁茂とレキ化が進んでしまった。ただ、当時それほどきれいな川とは思っていなかった。水質的には、今の方が良いのだろう。

○河川を仕事として関与し始めたのは、1987年に当時の建設省中部地方建設局に入局してからである(現・国土交通省中部地方整備局)。今まで主に河川系の業務に携わってきた。
(三重河川、木曾川上流、本局(河川工事課、地域河川課)、設楽ダム、浜松河川など)

○豊橋河川事務所に2018年度、事業対策官として赴任し、懇談会の担当となった。入局し30年経ち、初めて地元の河川に携わることができたのである。

○2020年4月に浜松河川国道事務所(副所長)に異動。



矢作川アースワーク 2015年頃

あなたにとって、流域圏懇談会とは

赴任直後、流域圏懇談会のあり方について深い理解のないまま、突入した感じである。何せ最初のイベントの場が、佐久島泊まりで行われた「担い手事例集交流会」であり、今までにない経験をした。参加したメンバーの流域に対する熱い語りを見て、衝撃を受けたのである。

懇談会は、情報共有の場として大事だと思っている。なかなか課題解決するまでの場にはなれないが、様々な課題が見えるようになることや、ネットワークが広がっていくことを期待している。河川管理者としては、災害という視点で川を見がちであるが、やはり流域全体を考えることも大切である。

豊橋河川事務所も様々な業務を抱えており、事務局も運営には苦慮しているが、私自信は結構楽しんでやっている。

流域圏懇談会は、河川管理者も含め参加者がみんな同じ方向を向いて議論できる場だと思う。

ただ川部会は、河川管理者の出番が多く、説明責任を果たす場となるが、事業のPRの場だとも思っている。

川部会の支川モデルの取組は、昨年まで家下川のみを扱ってきたが、流域をもっと広い目で捉えたほうが良いと思い、今年度は他に、郷東川(安城市)や岩本川(豊田市)など現場に行くことが出来て良かったのではないかな。やはり現場を見て感じることは重要だと思う。

あなたにとって、流域圏懇談会とは ～川部会の風景～



郷東川(安城市 2019.9.2 川部会WGにて)



岩本川(豊田市 2019.10.15川部会WGにて)

岡崎百景 - 私とまちの100のドラマ -

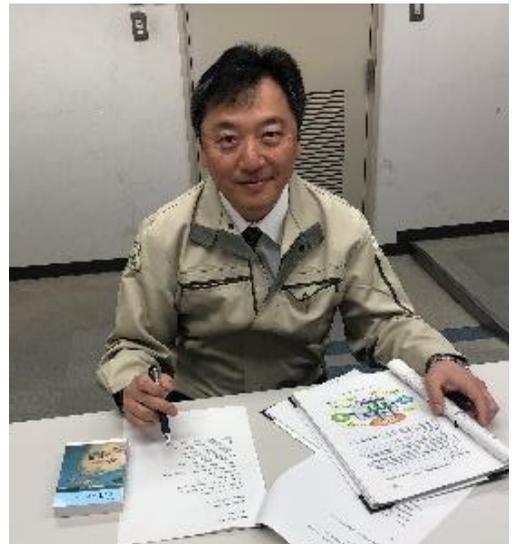
NUMBER|推薦番号

青空の下のサンドアート
[矢作川アースワーク]

10



岡崎市HP・岡崎百景より 2012年撮影



豊橋河川事務所での神本さん

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

今年度で懇談会も10年が経過した。組織運営上も様々な試行錯誤があり、現体制に落ち着いている。しかし、今後の10年をどのようにやっていくのか、は真剣に考える必要がある。メンバーの固定化や世代交代も考える必要がある。今年度、最初の10年のまとめを行っているが、次年度は今後のあり方についても議論していきたい。懇談会での河川管理者(豊橋河川事務所)の役割とは何か、流域圏内の責任を負えない課題をどのように他者へ働きかけていくのか、少しでも解決へと作用するような組織になることを期待する。

突然転勤してすみません。隣の浜松(河川国道事務所)に行きます。2年間ありがとうございました。楽しかったです！



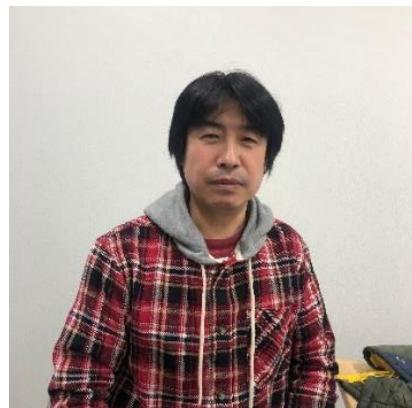
石原淳 さん

(アジア航測 (株) 中部国土保全コンサルタント技術部 環境課)

山部会 川部会 海部会 市民部会

個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 **事務局**

ヒアリング参加者 : 近藤 朗
 レポート作成者 : 近藤 朗
 取材日 : 2020年2月23日
 取材場所 : メイホーエンジニアリング名古屋支店



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

1978年生まれ、豊田市矢作川の右岸側・鶉の首あたりが故郷となる。高知大学(農学部生物資源科学科)で学んでいたため、私にとっての川と言えば何といっても仁淀川。矢作川くらいしか知らなかった自分にとって、こんな綺麗な川があるのかと感激したのを覚えている。その後、いったん種苗関係の民間企業に就職し(群馬県、広島県)、2008年に現在のアジア航測に転職した。自然環境系の仕事がしたいという思いがあった。あれから約12年が経過し、自分の専門である植物を中心に、現地調査をはじめ、調査結果のとりまとめ、保全対策の検討等を主に行っている。

小学校高学年の時(1990年ころ)、父親に連れられて海上の森に行ったのを覚えている。立木トラスト運動のころで、その時に曾我部行子さんに出会ったことを強烈に覚えている。現在の矢作川流域圏懇談会の業務を通じて何十年かぶりに再び彼女に会うこととなり、これには驚いた。ちなみに、私は「とよた森林学校」の二期生でもあった(約10年前)。その関係で、山本薫久さんや北岡明彦さん、足助里山ユースホステルの小川光夫さんとも出会っており、今回業務でまた繋がることとなった。何か、因縁を感じる。

あなたにとって、流域圏懇談会とは

当社アジア航測がこの業務(事務局補佐)を担うようになったのは、2015年度から。それまでは、別のコンサル(建設技術研究所)が担当していた。最初はものすごく戸惑いが大きかった。懇談会では、山部会を担当することになったが、ここからコンサルタント業務としては、想像を絶するような体験をすることになった。

山部会は4地域(岡崎市・豊田市・恵那市・根羽村)で泊まりで開催されることも多く、昼の会議以外にも夜ともなれば(あるいは明け方まで)、参加者が熱く本音で語り合う場面に遭遇した。その他にも2015年9月12日~13日にかけて、長野県安曇野地方での現地見学(近自然の森づくり)を開催し、9月25日~26日にかけては、初めての山と海の合同部会を実施、何よりも衝撃だったのは、この年の山村再生担い手づくり事例集調査において、近藤さんと共に根羽村「天下杉」取材に行ったこと。行く前には、市民会議をどうやって盛り上げようとか、山部会と川部会のギャップ・温度差に悩んでいたこともあり(川部会メンバーがどんどん去っていったことなど)、車中で近藤さんに相談を持ち掛けていたのであるが、天下杉に出会ったことで、そこに答えを見つけたような気がした。

天下杉の70代のおばさまたちが、「まず自分たちが行動すること、そして自分たちが楽しまなければ、他人を喜ばすことができない」と言われたことが、僕の心に突き刺さった。それから仕事においても、生き方についても、180度考え方が転換した！自分が楽しんで、自発的に行動しようと。この懇談会の業務には、すごく思い入れがある。

今でも、山部会は凄いと思うことがある。2019年度も、矢作川流域圏懇談会10年誌をどうしようと悩んでいたが、編集会議をどうするのかという提案について、山部会でまずパッとまとまってしまった。煩わしい作業になるであろうにも関わらず、編集委員候補者は誰もイヤだと言わなかったことにビックリした。まさしく自発的に、そして楽しもうとしてるんですよ。



2015年9月 近自然森づくりの見学



2015年9月 山と海の合同部会



2017年秋 竹林利活用勉強会(天竜川)



2015年9月 矢作川流域圏混浴会(長野県中房温泉)



根羽杉の浴室



2015年9月 明け方に及ぶ議論

2015年9月 山・海合同部会(西尾市幡豆) 山・海・川のイナバウアー



2015年12月 天下杉取材
実験台にされた近藤

天下杉の演芸は見る側も主役



2016年1月 天下杉公演に出演するメンバーたち

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

「山村再生、及び矢作川流域圏担い手づくり事例集」を通じて、多くの関わりが出来てきた。これから上下流で繋がりをつくっていったら良い。その交流が普通にできたら、課題解決へとつながる。その基盤は今、既にあるので、これからそれを活かそう。そのために今実施している担い手交流会は、必ずやらねば！



取材を受ける石原さん
2020年2月

2017年から始まった担い手事例集交流会をこれからも続けていきたいと決意を語る石原さん その思いはとて熱い！



事例集交流会で活動報告をする戸田氏
2017年4月



2015年12月 天下杉取材
石原さんタジタジ(左)と「天下杉」のみなさん
取材は、公演見学含め8時間ほどに及んだ

流域圏懇談会について、フリーコメント (文責 近藤朗)

私と石原さんとの一番の思い出と言えば、「天下杉」につきる。石原さんがおっしゃったように、彼の人生そのものを左右した出会いだった。これは決して大げさな話ではなく、あの衝撃のファーストインパクトを無条件に受け入れてしまったのが、石原さんと私(近藤)なのである。



まだ誰も見たことのない
天下杉の幻のシンクロ公演での1枚



2017年4月 矢作川流域圏懇談会 第1回事例集交流会での天下杉 * 中央は天下杉の石原さん



中田 慎さん

(アジア航測(株) 国土保全技術部SABO課)

山部会 川部会 海部会 市民部会

個人 市民団体 関係団体 学識経験者 行政 **事務局**

ヒアリング参加者 : 神本 崇、丹羽健司

レポート作成者 : 丹羽健司

取材日 : 2020年1月28日

取材場所 : 豊田市職員会館



あなたのお仕事やご活動、関心のあることについて教えてください

1971年生まれ、東京の多摩地域で過ごし、早稲田大学教育学部理学科で地質・古生物学と植物生理生態学を学んだ後、筑波大学大学院で流域管理研究室に所属して、主に溪畔林の樹木根系を研究した。研究の延長での仕事をと、アジア航測に入社し、今に至る。

矢作川流域圏懇談会に関わる前、長野の松本で地域住民とのワーキングを通じた地域づくりの仕事があった。そこで人に寄り添う仕事を初経験。矢作川に来て早稲田の研究室の先輩である洲崎さんと再会してまずびっくり。もともと森林生態や植物をへて山の防災、特に砂防が専門だった。

いま関心があることは、今後私はどのように生きるべきか？自分にできることは何か？であり、大きく2つあると考えている。

まず、1つは今まで生きてきた中で培った研究・技術について、次世代に伝えるということ。たとえば防災のことだが、根底にあるのは自然であり、そこで生きている「人の生活」を知るということで、自然無くしては成立しえない人間社会について「どれだけ分かりやすく伝えることが大事か」を意識している。一般に、難しい話だと耳を貸さない人が多くなるが、本当は知っていれば生活しやすくなるということを知ってもらいたい、そのトランスレートをどのようにやっていくかが課題の一つだと思っている。

もう1つは、自給圏について、である。次世代にどんな社会を残すかをまじめに考える必要があると思っています、これは矢作川流域圏の仕事をやっている中で気づかされたことである。いま、享受している幸せについて簡単に分かる言葉・内容で説明できたら嬉しい。

その上で、今後、エネルギーを地域で自給できるような形について、都市近郊でできることとして探してみたいと思っている。今の自分のキーワードとして、「FEC自給圏；食糧(Foods)とエネルギー(Energy)、そしてケア(Care=医療・介護・福祉)」であり、これらを地域内で自給することが地域の自立につながると思い、このうち、特にエネルギーの域内自給に魅かれている。

あなたにとって、流域圏懇談会とは？

私にとっての流域圏懇談会は、「仕事そのもの」と「人との関わり合い方」のターニングポイントといえる。「ありがとうございます、また来てください」と自然に喋ることができ、今でもとにかく笑顔で仕事するようにしている。

通常の業務と違って他人ごとでなくなってしまった、というのは非常に驚きである。ある意味、矢作川が第二の故郷のように、意識が変わってしまった。懇談会の立ち上げの段階では喧々諤々の議論があったと聞いているが、それらを経て雰囲気や方向性が安定したところからタッチできたのはラッキーだったといえる。ほかでは、このような場合コンサルは空気のような存在でいなければならないと言われたが、3年目を降から違った。思いを語れる人が集まる場があるということが重要だということ、そこに我々も同じ方向を向いて存在してよいということを許してくれた事務局、特に神本前事業対策官の寛大さがあった。今では、これが脈々と引き継がれていくという確信がある。

また、このキーパーソンヒアリングで丹羽さんから伺った懇談会のあり方とは、「妄想力からの具現化」の場であるということであり、これを聞いたときに、何となく腑に落ちた。今後も、「妄想を言いやすい雰囲気をつくること」、「これらをしっかり記録していくこと」を実践したいと思う。これこそがマイルストーンになり、成果になる、というのは非常に勉強になった。

これからの流域圏懇談会にどんなことを期待しますか？

今まで補佐をする中では、地図や赤色立体地図を使った流域圏風呂敷という空間軸、年表という時間軸の共有ツールの提供を心掛けてきた。ここ数年でだんだんと落としどころや方向性が見えてきていると感じているので、事務局補佐が懇談会に期待する、というのもしおかしな話だが、次のように感じている。

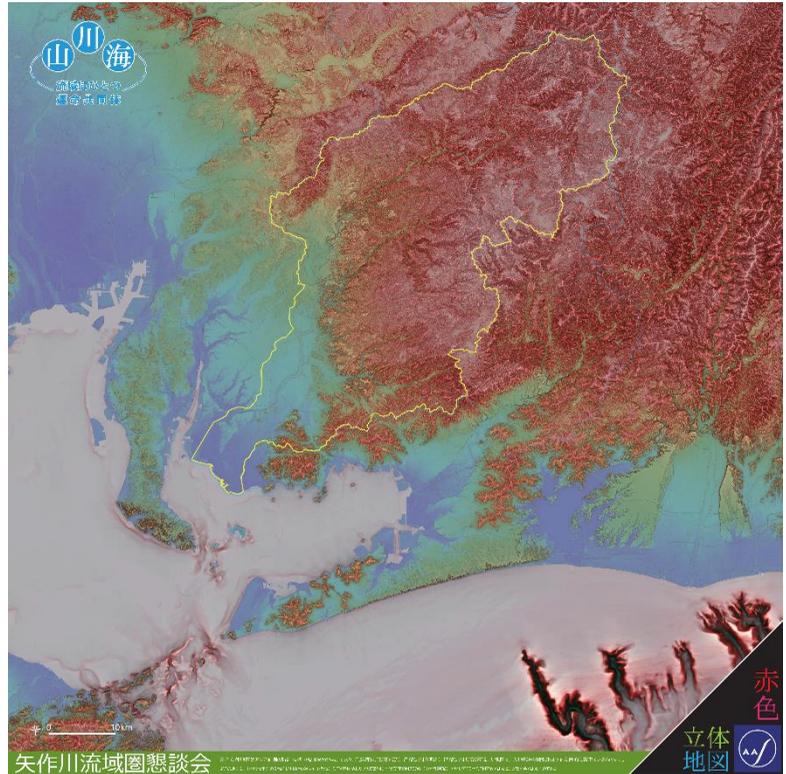
流域圏懇談会の究極の目標は、流域に住む生活者に流域圏という概念を知らず知らずのうちに植えつけることだと思っており、それを発信してはどうかと考えている。得てして、一般の方からは真面目なことを言うと面倒くさがられるものなので、「気づいたときには流域単位で語れる世の中になっている」となるような方法をぜひ検討して発信して欲しい。真面目にやることはとても大事だが、ふわっとしたところから楽しく相手に概念を伝えることができれば素敵なのではないだろうか。



2016年7月 奥矢作森林フェスティバルにて
若いママさんが根羽スギのワッパ弁当箱に興味を持ってくださったので、真面目な流域の概念を分かりやすく説明



2018年4月 事例集交流会 | 佐久島にて
矢作川流域圏風呂敷を翻らせて、メンバーの方々と記念撮影！とてもいい思い出



矢作川流域圏風呂敷

およそ70cm四方に矢作川流域の上流から下流、そして三河湾全体を表現した、布製のマップとなっている。年度末の全体会議において、流域圏懇談会メンバーに配布した(2018年および2019年)。

【ふろしきの記載内容】

赤色立体地図は、アジア航測の特許技術(特許第3670274号)であり、急斜面ほど彩度を高く、凸部ほどより明るく、凹部ほどより暗く表現した地図で、大地形から微地形までを立体的に表現できるものです。
※この地図は、国土地理院の5mおよび10mメッシュ(標高)DEMで作成した陸域部と海上保安庁のM7000(1m等深線)を用いて20mDEMで作成した海域部を合成したものである。

流域圏懇談会について、フリーコメント

事務局では、かつて、前調査係長の服部さんが「今までの会議スタイルを、形にこだわらずに壊していってみよう！」という試みを進められ、実際に少しずつほぐして、メンバーの方と話しながら改良してきた。ここに集まる人たちの、いわばフラットな関わり合いをサポートする形だった。そして、この関係性が継続できていることが不思議であり面白い。事務局補佐としては、仕事だけど、いかに人に寄り添うか？を考えてきたし、これからもそのように進めたいと思う。

現代の仕事にありがちな効率とはすなわちタスクをこなすことであるので、「楽しい」とは対極にある。「楽しい」が起点にないと継続は難しく、フラットな関係性をつくりにくくなる原因となるのではないかとも思う。

懇談会の事務局補佐を務めることで、これまで想像もできなかったような多彩な人たちとの稀有な出会いがあり、とても感謝している。このような仕事をもっと面白がることができれば、さらにもっと良い方向に向かうと思っている。

若いママたちが、「私は矢作川流域よ」「私は多摩川流域よ」などとおしゃべりする光景が普通になれば面白いと妄想する。流域でモノを考えることがオシャレと感じることができるよう、今後いろいろな発信をできたらと思う。